朝鮮民話集

フンブとノルブ

朝鮮民話集

フンブとノルブ

許元吉　編

朝鮮・平壌

外国文出版社

1991

はじめに

金日成主席はつぎのように述べている。

「朝鮮人民は5,000年の悠久な歴史をもつ人民であり、輝かしい文化をもつ英知ある人民です」

本書は、5,000 年の長い歴史と輝かしい文化を誇る朝鮮人民のあいだに伝わる多くの民話のなかから、教訓的でしかも楽しく読めるものを選んで編んだものである。

朝鮮人民は勧善懲悪のモラルに徹していたので、民話にも善には善の報い、悪には悪の報いがあるというストーリーが多い。

本書の表題――『フンブとノルブ』もその代表的な民話の一つであり、また本書に収められた『将軍堂の話』『弔いの頭巾をかぶったネコ』などもそうである。そのほか、擬人化されたヤギ、ウサギ、ネコ、トラ、キツネなども登場するが、それらはそれぞれ一定の階層の人物を代表しており、勤勉で善良な勤労人民は賢明で、横暴な両班（リャンバン）（貴族）や官吏は愚かであると諷刺的に描かれている。また人間の信義や友情、勤労の喜びと民族の美風良俗を反映した話も収められている。

古い時代の民話であるため、おおらかな幻想の世界も広がっているが、それも一つの夢だったと言えよう。しかし、これらの民話のなかには、朝鮮人民が古くから抱いてきた美しいロマンや、生活から得た貴重な教訓がもられていることを見逃してはなるまい。

目　　次

3 人の兄弟とその妹 …… 1

恩知らずのトラ …… 8

ふしぎな筆 …… 16

将軍堂の話 …… 23

あきれた行商人 …… 27

ほとけが選んだむこ …… 33

恥をかいたキツネ …… 40

兄岩と弟岩 …… 43

とむらいの頭巾をかぶったネコ …… 46

かしこいウサギ …… 51

欲張り裁判の失敗 …… 55

金の壷を掘りだした若者 …… 60

フンブとノルブ …… 64

ヘビの恩返し …… 83

自分の指を切った盗っ人 ･････････････････････････････ 90

おろかな地主 ･････････････････････････････････････ 94

ほんとうの友 ･････････････････････････････････････ 97

さかさにつけた鼻 ･･････････････････････････････････ 104

強欲商人と悪役人 ･･････････････････････････････････ 109

2 人の怠け者･･････････････････････････････････････ 115

3 人の兄弟とその妹

ある村に年老いた農民夫婦と 3 人の息子が住んでいました。村人たちは勤勉な孝行息子を持つその一家をうらやましがりましたが、農夫は娘のいないのがものたりなくて仕方がありませんでした。

ところがその後、何年かたってからそれほど待ち望んでいた娘が生まれました。農夫はそのひとり娘を目の中に入れても痛くないほどかわいがりました。娘はやがて一輪のバラのように愛らしく育ちました。

娘が 10 歳になった年の夏、尾が九つもある年とったキツネが、峠を越えてイチゴを取りにいったその娘を食べてしまいました。そして、クルクルとトンボ返りをして娘に化けたのち、農夫の家へ姿を現しました。

しかし純真な農夫は、赤いイチゴの入った手かごをさげて、ニコニコしながら帰ってきた娘がキツネだとは夢にも思いませんでした。

農夫は娘をあまりにもかわいがっていたので、ニセの娘が自分をだましていることにも気がつきません。それでなんでも娘の言いなりになっていました。

ところが不思議なことが起こりました。飼っていたニワトリが毎晩１羽ずつ鳴き声も立てずに死んでしまうではありませんか。病気にかかったわけでもないのに死んでしまうのです。

「これはきっと家が滅びる不吉なまえぶれじゃ。どうしたわけだか調べてみよう」

農夫は長男に、いり豆を１升渡しながら言いました。

「ニワトリがどうして死ぬのか、馬小屋のそばで夜通し見張るのだ」

それで長男は、眠くなると豆をかじりながら鶏小屋を見張りました。

虫の鳴き声も止み、あたりがしーんと静まりかえったころ、どこからか足音が聞こえてきました。

ぞーっとしましたが、恐ろしさをこらえて音のする方を見つめました。一瞬かれは自分の目を疑いました。そこへやってきたのは、なんと妹だったのです。

妹はそっと鶏小屋に近づくと、いきなり一番大きなニワトリの口に指を突っ込み、その肝を取り出して、おいしそうに食べると姿を消してしまいました。長男はその場に呆然と立っていましたが、やがて気を取りもどして鶏小屋に行ってみると、肝を取られたニワトリは死んでいました。かれは背筋がぞくぞくしました。

夜が明けてから、長男は父に昨夜の出来事を知らせました。

ところが、父は不機嫌そうに言いました。

「何を寝言を言っているんだ。居眠りをして夢でも見たんだろう」

その夜、農夫は次男を呼んで同じことを言いつけました。

「夜中に眠くなったらこの豆を食べるがよい。居眠りをしないでしっかり見張るのだぞ」

そしてまた豆を１升与えました。

次男は日が暮れると小屋の隅にかくれていました。豆を食べながら夜遅くまでがんばりましたが、なんの気配もありません。ところが明け方になって足音が聞こえました。

次男は大きく目を見張りました。すると妹がニワトリの肝を取って食べるではありませんか。夜が明けると早速、かれはありのままを父に話しました。

父は大声を張り上げました。

「妹をねたんで、ありもしないことをぬかしてぬれぎぬを着せるつもりか、不孝者めらが…。とっとと出て行くがよい」

真っ赤になって怒った農夫は、2 人の息子を家から追い出してしまったのです。

その夜、農夫はまた三男を呼んで、鶏小屋を見張るようにと言いつけました。

小屋の隅にちぢこまっていた三男も、やはり妹がニワトリの肝を食べるのを見ました。しかし、ありのままを話せば、兄たちのように追い出されそうなので、「夜中にニワトリがひとりでに倒れて死にました」とウソをつきました。

「それに違いない。お前こそわしの息子じゃ。妹をねたんで親のわしをだまそうとした兄たちは、わしの子じゃない」

三男の言葉を真にうけた農夫は、喜んでこう言いました。それで三男は追い出されずにすんだのです。

罪もなく家を追われ、山の中をさすらっていた長男と次男は、道端に倒れている年寄りに行きあいました。うめき声を出して苦しんでいる老人を気の毒に思った兄弟は、その老人をかれの山小屋に背負って行きました。

「ありがたいことじゃ。ところでお前さんたちは、どこへ行くところじゃな」

二人の手厚い介抱で正気に返った老人は、こうたずねました。

「わたしたちは家から追い出され、あてもなくさすらっているところです」

兄弟は老人に、ことの次第を話しました。

「なんと気の毒なことじや」

老人はこう言ってビンを 3 本、かれらに与えました。

「粗末なものだが、これをあげよう。白い水の入っているビンはいばらのビン、赤いのは火のビン、それからこの青いのは水のビンじゃ。あぶない目にあったときは、このビンを投げなさい」

老人はビンの投げ方も教えてくれました。兄弟は礼を言ってまた旅に出ました。

何年かの放浪を終えたのち、2 人が故郷に帰ってみると家は荒れはて、庭には雑草がいっぱい生えていました。2 人は不審に思いながらも庭に足を踏み入れました。

「兄さん、いままでどこへ行ってたのよ」

人気のない家の中からニセの妹が現れて、いそいそと 2 人を迎えました。娘の目がらんらんと異様に燃えていました。

「お父さんやお母さんは留守なのかい？」
まず長男がたずねました。
「2 人とも亡くなりました」
「弟は？」
「兄さんも亡くなりました」
「家畜はどうした？」　、
「ニワトリやブタはわたしが食べてしまいました」
　兄弟は妹がニワトリやブタばかりでなく、家族たちも食べたに違いないと思いました。2 人は恐ろしさに息が止まりそうでしたが、つとめて笑顔をつくり、こう言いました。
「歩きどおしでのどがかわいた。丘のふもとの泉に行って冷たい水を汲んできておくれ」
「じゃ、部屋にあがって休んでいなさい。水を汲んできますから」
妹は水がめを頭にのせて泉に出かけました。兄弟はこのときとばかり、一目散に逃げ出しました。
泉から戻った妹は 2 人がいないのに気がつき、ものすごい勢いで追ってきました。
「逃げようったってだめだぞ。止まれ！」
振り返って見ると、尾が九つもある大きなキツネが追ってくるではありませんか。兄弟はやっと、キツネが妹に化けていたことに気づきました。
キツネは、みるみるうちに 2 人に追いつきました。そのとき長男は、キツネめがけて白いビンを投げつけました。するとたちまち、あたり一面にいばらのやぶが広がりました。キツネは体中とげに刺さって悲鳴をあげましたが、それでもやぶをかきわけて追ってきます。

こんどは次男が赤いビンを投げつけました。するとビンが割れた拍子に火花が散り、あたり一面に炎が燃え上がりました。しかしキツネはとげに刺され、火傷を負いながらも必死に追いかけてきます。

「お前たちも食べてやるぞ。一人残らず食べてやるんだ！」

キツネは毒々しくののしりながら、炎の中をくぐって駆けてきます。

長男は最後に青いビンを投げつけました。するとどうでしょう。ザーッと水の流れる音がして、あたりはたちまち海になってしまいました。2 人を追っていたキツネは水におぼれて苦しそうにもがいていましたが、とうとう海の底に沈んでしまいました。

こうして親兄弟のかたきを討った兄弟は、家に帰って末長く幸せに暮らしたそうです。

恩知らずのトラ

冠帽峰（コワンモ）のいただきにほら穴が一つありますが、むかし、そのうす気味悪いほら穴に年老いたトラが住んでいました。

トラはそこで、毎日食べては眠るだけの味気ない暮らしをしていました。

ある日、ノロの足をたいらげたトラは、なにかたいくつしのぎをしたくなりました。

（この年になるまで広い世間も知らずに、むだな歳月を送ったものだ。井の中のかわず大海を知らずというのは、わしのことじゃないか。老いぼれる前に、金剛山（クムガン）の見物にでも出かけよう）

目をパチパチさせてこう考えたトラは、やがてのっそりと立ち上がり、旅に出ました。

トラは、昼は狩人の目をさけて森にかくれ、夜は谷を抜けて 10 日目に金剛山に着きました。

高くそびえる峰、清い谷のせせらぎ、びょうぶをめぐらしたようながけから流れ落ちる滝、天女が舞いおりるという金剛山は、うわさに聞いたよりもはるかに美しい山でした。

谷から谷へとその見事な景色を見てまわったトラは、断髪嶺(タンパル)を越え、淮陽(ヘヤン)の方へ足をのばしました。

ところが、そのあいだ幾日も休まずに歩いたので、さすがのトラも腹がへってきました。

それで、なにか餌はないものかとあたりを見まわしていると、どこからともなく、子犬の鳴き声がしました。

耳をそばだてて、声のする方へのそりのそりと歩いていったトラは、米びつの形をした大きな箱を見つけて中をのぞきこみました。するとそこに子犬がつないであったのです。

久しぶりに餌を見つけたトラの腹の虫がグウグウ鳴りました。さっそく子犬にとびかかろうとした瞬間、不吉な予感が頭をかすめました。

（飼い犬が山の中にいるなんておかしいぞ。人間はずるいからな。気をつけないと、とんでもないことになるぞ）

こういうときには、ひもじくても用心が肝心だと思いなおしたトラは、よだれを流しながらきびすを返しました。

でもこのまま引きさがるのは残念だし、山の王さまのこけんにかかわるような気がします。

（ここでうしろを見せるのは、トラの名おれというものだ。わななんか、犬を食べてからぶちこわせばいいじゃないか）

カーッと頭にきたトラは、「ウォーッ」と山がくずれるような大声で威勢よくほえると、さっと箱の中へおどりこみました。

一瞬、ガタンと音をたてて戸がしまり、トラは身動きができなくなりました。餌を食べるどころではありません。

びっくりぎょうてんしたトラは、するどい爪で壁をひっかきながらあばれましたが、檻(おり)はびくともしません。

トラは目の前が真っ暗になりました。これでは、とても助かりそうにありません。

「ほとけさま、あわれなトラを助けてください」

トラは前足をすりあわせ、泣き声をあげて、いっしょうけんめいに祈りましたが、うんともすんとも答えがありません。

トラは一日中檻の中にとじこめられていました。すっかりあきらめていると、あくる日の明け方になって、落ち葉をふむ音が聞こえてきました。

トラはほそ目をあけて、音のする方をうかがいました。細道をひとりの男が歩いてきます。

「ここであの男の手にかかって死ぬのか。せめて思いっきりほえてやれ」

トラは声をふりしぼって、「ウォーッ」とほえました。

肝をつぶした男は、その場に立ちすくんでしまいました。それは楡岾(ユジョム)寺の年老いたお坊さんで、檻の中のトラを見ると青くなって逃げ出そうとしました。

山で暮らしているトラは、お坊さんが生き物をあわれむことを知っていました。それで半泣きになって言いました。

「なさけ深いお坊さま、金剛山に修業にいく道中で、運悪くわな

にかかってしまいました。どうかお助けくださいまし」
　トラの話を聞いてお坊さんは、立ち止まりました。
　（すんでに、罪をおかすところだったわい。あれをおきざりにすれば、狩人に撃たれるだろう。助けてやらなければ）
　一生をほとけに仕えてきたお坊さんはこう心でつぶやいて、トラにたずねました。
　「助けてやったら、わしを食い殺しはしないだろうね」
　「め、めっそうもない。いくらけだものだって、命の恩人にそんなそら恐ろしいことを。助けてくだされば、お坊さんのご恩はいつまでも忘れません」
　トラがしきりに哀願するので、お坊さんは戸をあけてやりました。トラは檻から出ると、お坊さんの前にひれふしました。
　「おかげさまで命拾いをしました。このご恩をどうお返ししたものでしょうか」
　頭を地面にすりつけて礼を言ったトラは、森に向かって歩き出しましたが、なにを思ったのか、まもなく戻ってきました。
　「お坊さま、もう一つよいことをしてください」
　「よいこととはなんのことじゃ」
　「ほとけさまにお仕えするお坊さまが、それをおたずねになるとは解せませぬ。ひもじいものに食べ物をほどこすのは、ほとけの道と聞いております。腹がへったので、あなたさまを食べさせてもらいたいのです」
　トラは本性を現して、ぬけぬけと言い放ちました。
　「恩知らずめ。畜生とはいえ、恩を仇で返すとはなんと恥知らずなやつじゃ」

あっけにとられたお坊さんは、声をあらげて叱りました。
トラは、たけだけしく言い返しました。
「このおいぼれめ。ほとけの教えを守ろうというのがなんで悪い。生き物を殺してはならぬというほとけのおきてにそむいて、わしをわなにかけたのもお前たち人間どもだ。許すわけにいかん」
トラは真っ赤な口をあけて、お坊さんに噛みつこうとしました。
せっぱつまったお坊さんは、トラに言いました。
「ひもじいだろうが、わたしを食べてもたたりがないか、誰かにたずねてみたらどうだろう」
たたりと聞いてトラは、背すじがひやりとしました。
「それもそうだな」
さきほど、かるはずみなことをしてわなにかかったトラは、用心にこしたことはないと思ったのです。
お坊さんは、そばのツタに声をかけました。
「わなにかかったあのトラを助けてやったら、わしを食い殺すというのだ。こんな仕打ちってあるだろうか」
ツタは体をよじらせて、にくにくしげに答えました。
「坊主なんか、見ただけでもむなくそが悪くなるわ。人間どもはおれたちを切りきざんで皮をはぎ、帽子や敷物をつくるじゃないか。トラに食われてしまうがいい」
トラはツタの答えを聞くと、きばをむきだしてお坊さんに飛びかかろうとしました。
お坊さんは、もういちど頼みました。
「それはツタの思いちがいだ。今度はあのウサギに聞いてみよう」

お坊さんは、ウサギにたずねました。
「わなにかかったトラを助けてやったら、わしを食い殺すというのだ。こんな仕打ちってあるだろうか」
横からトラが口をはさみました。
「ひもじいものに食べ物をほどこせというのは、ほとけさまの教えだ。だから、坊主を食べてやるのは道理にかなったことじゃないか」
ウサギはけげんそうに耳をかしげて、たずねました。
「話を聞いただけでは様子がわからないな。どんなふうだったか、そのとおりやってみてくれないか」
トラとお坊さんは、そうすることにしました。檻に向かってかけていったトラは、「わしがこうしておどりこんだのだ」と言って、檻の中に入りました。
「じゃ、戸はどのようにしまっていたんだい？」
お坊さんは、元どおり戸をしっかりしめました。
それを見てウサギははじけるような声で笑いました。
「わかったよ。さあ、助けるなり、かみつくなり、好きなようにすればいい」
「ウォーッ」
トラは檻の中でほえましたが、あとの祭でした。
「どうもありがとう」
あやうく虎口を逃れたお坊さんは、ウサギの頭をなでました。
「悪者になさけをかけてはいけない、ということを忘れないでください」こう言ったウサギは、トラに向かってひややかな声で言いました。

「もう、お前のような恩知らずを助けてくれる者はいないぞ」

ウサギは、ピョンピョンと森へかけていきました。

檻の中のトラは、それ以上金剛山見物もできず、狩人の鉄砲に撃たれて死んでしまったそうです。

ふしぎな筆

ある山里に千童（チョンドン）というひとり者の下男が住んでいました。

かれは絵を描くのが好きでしたが、貧しくて筆が買えませんでした。それで柴刈りや魚釣りに行っては、棒切れで地面や砂場に絵を描いていました。

こうして3年のあいだ、熱心に腕をみがいたかいがあって、かれの描いた鳥や魚の絵はあたかも生きたほんもののようでした。

それで村人たちは、かれのところへ紙を持ってきては絵を描いてくれと頼みました。しかし、かれには筆がなかったので、絵を描いてやれませんでした。

「筆があったらなあ」

千童は筆が欲しくてたまりませんでした。

そんなある日、山へ柴刈りに行ったかれは、木にもたれて休んで

いるうちに、いつのまにか眠ってしまいました。夢の中で雲がわき起こり、幼いころ死に別れたなつかしい母が現れました。

「千童！　何をそんなに心配しているの」

「母さん、村人に絵を描いてあげたいのですが、筆がないのです」

「それは感心ね。しばらく待っておくれ」

こう言って姿を消した母は、まもなく筆を持ってきました。

「さあ、これ」

母は金色の筆をさし出しました。

「やー、筆だ」

千童は歓声をあげました。その拍子に夢がさめ、母の姿も消えてしまいました。がっかりして手を見おろした千童は、目を見張りました。なんと夢に見た金色の筆があるのです。

「母さん、ありがとう」

あの世でも自分を思ってくれる母がありがたくて、千童は目がしらが熱くなりました。

村に帰った千童は村人に頼まれた絵を描きました。最初は隣のおじさんのために、青い鳥を描きました。すると青い鳥は羽ばたきをして庭先へ飛び立ちました。

つぎはツルを描きましたが、筆をおくがはやいか空に飛び立って、屋根の上で舞いました。

そのとき、中二階で寝そべっていた地主がその光景を目にして、おりてきました。　地主は下男部屋をのぞいて、千童の筆先から鳥が飛び立ったことを知りました。

（下男のくせに、あんな宝をもっているとはけしからん）

地主の胸に、よこしまな考えがむらむらと起こりました。

「こら、筆をどこで手に入れた。こっちへよこせ！」
地主は部屋の中へ入ってわめきました。
「いやです。これはお母さんがくれたんです」
千童は奪われまいと筆をしっかり握りました。
「ウソつけ！　死んだ母がどうやって筆をくれるのだ」
地主はやにわに筆を取り上げようとしました。千童は部屋から飛び出しました。
「待て！」
地主はものすごい見幕で追いかけてきます。千童は村外れの道を必死に走りました。息をはずませていた地主は、馬にまたがって追いついてきました。
千童はすばやく金色の馬を描きました。
「ヒヒーン」
金色の馬は高くいななくと口から火を、耳から煙を吐き出しました。千童はひらりと馬にまたがって駆けました。
「待て！…」
　地主は千童を追いながら怒鳴りました。千童は矢を描いてそれを放ちました。
「ヒューン」
額に矢が突きささった地主は、悲鳴をあげて馬から落ちると、その場にのびてしまいました。山を越え、川を渡った金色の馬は、貧しい農家が軒をつらねている村に立ち止まりました。
農民は牛やすきがないので鍬で畑を耕し、子どもたちは服がないので部屋の中にとじこもっています。それに、かまどの煙も立ちのぼっておりません。

千童は気の毒な村人たちのために、筆を取り出すと絵を描きました。

牛のない家には雄牛を、すきのない家にはすきを、米の切れた家には米びつを描いてあげました。するとそれらは本物の牛やすき、米に変わったのです。子どもたちは服を着て明りの下で勉強をし、家々には笑い声や歌声があふれるようになりました。村人たちは千童に心からお礼を述べました。

ところである日、村に立ち寄った行商人が、そのうわさを広めました。うわさはついに欲の深い王さまの耳にも入りました。

「千童を捕らえてこい」

王さまの命令で千童は宮殿に引き立てられました。

「うわさによれば、お前は動く絵を描くそうだが、どれ、ここでひとつ描いてみせろ」

王さまが言いました。

千童は筆を取ってガマを描きました。すると、うす気味の悪いガマが背のびをし、王さまの方にのそりのそりと歩いていきました。王さまは顔をしかめて叫びました。「あの不届き者を牢屋にぶちこめ」

臣下が駆け寄って筆を取り上げ、千童を牢屋に入れてしまいました。

金色の筆を手に入れた王さまは、ひげをなでながら何を描こうか、としばらく考えていました。

「うーむ、世の中でもっとも尊いものは金じゃ。金塊を描くとしよう」

王さまはどんぶりほどもある金の塊を描きました。ところがどう

したわけか、それは石になってころころところがって、王さまの足に当たりました。

「これはきっと、絵がうまく描けなかったからにちがいない。それなら今度は、やさしいのを描くとしよう。そうだ、木がいい」

足をもみながら王さまはつぶやきました。

王さまはくねくねと曲がった木を描きました。するとそれはヘビになり、赤い舌をペロペロと動かしながら王さまにかみつこうとしました。

「ひゃー」

びっくりした王さまは、体をひるがえして逃げ出しまし美。三日も熱にうなされた王さまは、千童を呼び出すと筆を返し、ネコなで声で言いました。

「わしの言うことをよく聞けば、宮殿でぜいたくに暮らせるようにしてやる。湖を描くのだ」

「どんな湖ですか」

「湖のほとりに柳が茂り、清い水をたたえた湖を描くのじゃ」

千童は霧の立ちこめた広い湖を描きました。王さまは満足そうにひげをなでおろしました。

「魚がなくちゃものたりん。魚も描くのだ」

千童は筆を取って湖にいくつも点を打ちました。するとそれは魚の群れになって、湖の中で泳ぎまわりました。

王さまはまた、満足そうにひげをなでおろしました。

「湖を見たら船遊びがしたくなった。湖に船を浮かべるのだ」

千童が筆をふるうと湖に船が浮かびました。船にのって船遊びをしていた王さまは、また言い出しました。

「波が立たないので興がわかん。船がゆれるようにせよ」千童が筆を振りまわすと湖にさざ波が立ちました。

「波がおだやかでおもしろくない。もう少し波を高くするのだ」

そこで千童は勢いよく筆を振りまわしました。すると山のような波が立ちました。そして荒波に枯れ葉のようにゆれていた船は、とうとう王さまもろともに湖の底に沈んでしまったのです。

千童は金色の馬にまたがって村に帰り、勤勉な村人たちと一緒に仲良く暮らしました。

将軍堂の話

昼間も日のさしこまない深い森の中に、小さな村がありました。森の猛獣は夜ごと村を襲って家畜をさらい、村人を食い殺していました。

恐怖にかられた村人たちは、山の神の怒りをしずめるため絶壁の下に将軍堂を建て、毎年、山の神を祭って娘を供え物にしました。そうすれば災厄を免れ、豊作を収めることができると信じていたからです。順をきめて娘を捧げるならわしだったので、娘のいる家ではいつかは番がまわってくるのでした。

今年は、徐(ゾ)老人の 16 歳になるひとり娘が生けにえになる番でした。老人は大事な娘を供え物に捧げるのだと思うと、胸が張りさけそうでした。

「なんとむごい山の神だ。この老いぼれになんの罪があって、わしのかけがえのない娘を生けにえに捧げろというのだ」

老人は夜も日も涙とため息ばかりでした。娘も日一日と祭りの日が迫るにつれ、悲しみがつのるばかりでした。

ある日のこと、娘は裏の戸口に立って、涙にうるんだ目で遠い空を眺めていました。すると、そこへ１匹のガマが現れて敷居の上にまたがり、口をパクパクさせました。娘はガマがひもじがっているのだろうと思って残飯を一握りあたえました。ガマは飯を口にくわえ、森の中へ姿を消しました。

その後、ガマは毎日、そのころになるときまって戸口の前に現れては飯をもらうのです。ガマはだんだん大きくなって小牛ほどになりました。

ついに娘が生けにえになる日がやってきました。身仕度をする彼女の胸は張りさけそうでしたが、悲しみにくれている親のことを思うと、声をあげて泣くこともできません。彼女の頬頬にはとめどもなく涙が流れ落ちました。

娘が別れを告げて家を出たとき、父も母も地べたに身を投げて声をふりしぼりました。

「娘や、行くんじゃない！」

「父さん！」

「母さん！」

娘はその場にくずおれ、膝に顔をあててむせび泣きました。その悲しげな泣き声に、村人たちもみなもらい泣きしました。

娘を乗せたかごが将軍堂に着くと、男たちは祭壇に食べ物を供え、その真ん中に娘を座らせました。

やがて祭事を終えた村人たちは、彼女をひとり残して帰っていきました。

夜が更け、虫の鳴き声も途絶えたころ、堂の後ろ壁が崩れるような音がしたかと思うと、雄牛ほどもある大きなムカデが岩を伝っておりてきました。それを見た娘は気を失ってしまいました。

ムカデが娘を襲おうとした瞬間、祭壇の下からガマが姿を現し、ムカデめがけて毒を吐きかけました。

ムカデはガマに飛びかかりました。するとガマはもう一度毒を放ちました。ムカデは悲鳴をあげてのたうち、ついに動かなくなってしまいました。

ガマは祭壇の上で気を失っていた娘を背に乗せて家に帰りました。ガマが息をはずませながら姿を現すと、徐老人夫婦は夢ではないかと喜びの涙を流しました。

老夫婦は娘をあたたかいところへ寝かせ、手足をもんでやりました。しばらくして娘は息を吹き返しました。

ところで 2 人は、娘が帰ってきたことを村人たちに知らせませんでした。村に何かよくないことでもあれば、娘のせいにされはしまいかと恐れたからです。

こうして貧しい暮らしにガマまで養うようになった一家は、3 度の食事にもこと欠くようになりました。そのような事情を知ったのか、ガマは夜になると、どこからか米や塩を運んでくるのでした。そうしたある日の朝、娘が出した父の食膳をガマがひっくり返してしまいました。老人は娘の命を救ってくれたガマのことなので、怒りをこらえるほかありません。

徐老人は娘に、もう一度膳を出すようにと言いました。ところがガマは 2 度目の膳もひっくり返してしまいます。それでも老人は怒りをぐっとこらえました。

3 度目の膳が出されました。すると今度は、ガマが膳を持ち上げて老人の前にたたきつけたのです。

もうがまんできなくなった老人は、きぬた棒を取り上げてガマの頭を叩きました。

するとどうでしょう。部屋の中に濃い霧が立ちこめ、ガマの皮を脱ぎすてたりっぱな若者が現れたのです。魔法にかけられて、ガマの皮をかぶされていた若者は、棍棒で頭を叩かれなければ人間に返れなかったのです。

その若者は力持ちで弓術にもたけていました。老人はかれをむこに迎えました。

それからというものは、村に猛獣も現れなくなり、将軍堂に娘を捧げるならわしもなくなりました。

そして村人たちは幸せに暮らせるようになったといいます。

あきれた行商人

寒い寒いある日のことです。人家のない山道を上っ張りを着た櫛売りに革靴をはいた塩売り、毛皮の帽子をかぶった木綿売りの３人がとぼとぼ歩いていました。

夕日が西に傾きましたが、どこにも泊まるところはありません。重い足を引きずりながら歩いていると、近くに狩人小屋が見えました。

「ここで一晩休んでいこう」

３ 人はほっとして小屋に入りました。狩に出かけたのか主人は留守で、小屋の中はがらんとしていました。かれらは肩の荷物をおろすと、オンドル部屋にあがりました。

長いあいだ火を入れていなかったので、小屋の中はひんやりと冷気がただよっていました。

「火をたけば部屋があたたかくなりますがねえ」
ひえびえとした部屋で寒さにふるえていた櫛売りが言いました。
「そうですとも。体もぬくもりますしね」
塩売りが答えました。
「なにしろ、服を脱いでぐっすり眠れますからね」
木綿売りもあいづちをうちました。しかし誰も火をたこうとはしないで、他人の顔色をうかがっています。
戸外は肌を刺す冷たい風が吹きすさび、障子の目張りもすき間風に音を立てています。丸くうずくまっていた塩売りが言いました。
「わたしが火打ち石で火をつけますから、お 2 人は薪を運んできてくれませんか」
すると櫛売りが首を横にふりました。
「火打ち石は手間がかかりますね。わたしにマッチがあります。ちょっとぬれてはいますが、乾かせばいいのです。どうですか、そちらは薪を運んで来てもらいたいのですが…」
すると今度は木綿売りが首を横にふりました。
「冗談じゃない。ぬれたマッチをいつ乾かすんですか。わたしには壁にこすれば火がつくマッチがあります。火はわたしが起こしますから、お 2 人こそ薪を取ってきてくださいよ」
かれらは外へ出て薪を運ぶのがおっくうで、他人に運んでもらおうと勝手なことを言い合いました。
夜更けのすき間風が吹きこみ、火の気のないオンドルは氷のようです。3 人は寒さにブルブルふるえています。歯がカチカチと鳴りました。
こらえきれなくなった櫛売りが塩売りに話しかけました。

「もう寒くてたまりません。早く火をたこうじゃありませんか。わたしはわらじをはいているので、足が凍えて歩けません。ご苦労さまですが、革靴をはいたあんたが薪を取ってくるしかありませんよ」

すると、革靴をはいた塩売りは、

「お 2 人のために薪を取ってきたい気持ちはやまやまですが、わたしは防寒帽をかぶっていないので、耳が凍えてしまいました。どうでしょう、毛皮の帽子をかぶった方に運んできてもらいたいのですが」と言って、防寒帽をかぶった木綿売りにおしつけました。

「お 2 人のために薪を取りに行きたいのですが、わたしは綿入れを着ていないので体が冷え、おなかをこわしてしまいました。綿入れを着た方が運ぶべきだと思いますがな…」

木綿売りも口実をもうけて、櫛売りにおしつけました。3 人は、自分は動かないで他人を使おうとばかり思っていたので、いつまでたっても火をたくことはできません。

夜が更けて、明け方の冷たい風が吹きこみました。床が冷えきって、じっと座っていることもできません。体がふるえて、どうにもたまらなくなりました。

そこで木綿売りが知恵をしぼりました。

「わたしは毛皮の帽子のおかげで体がぬくもっていますが、あんたたちはずいぶん寒そうですね。薪を運んできてたけばよいのに、どうしてじっとしているのか気が知れませんよ」

すると塩売りが言い返しました。

「寒いなんてとんでもない。わたしは革靴をはいているので足がぬくもり、体に汗をかいていますよ。

寒さをしのぐには、なんといっても革靴が一番ですからね。どうもみなさんがお気の毒で見ちゃいられません。ぶるぶるふるえていないで、薪を運んできて火をたくんですよ」

櫛売りも小憎らしそうに口をとがらしてやりかえしました。

「寒さをしのぐには、靴より綿入れのほうが向きますな。わたしは暑くて体中汗ぐっしょりです。おふた方が気の毒でなりません。金もうけも命あっての話じゃありませんか。やせがまんせずに早く薪を運んできて、火を起こしなさいよ」

しかし今度も、誰も動こうとしません。

小屋はますます寒くなり、体がカチカチに凍えてきました。かれらは顔を股ぐらに埋めて夜を明かしました。もう、あごがこわばって口をきくこともできません。しだいに気が遠くなり、3 人の行商人は凍死寸前です。

そこへ狩りに出かけていた年老いた狩人が帰ってきました。かれはさっそく薪を運んできて、かまどに火をくべました。小屋の中がぬくもり、床がしだいにあたたかくなりました。

凍えていた行商人たちは、目をあけてあたりを見まわしました。

「どうしたのじゃ。オンドルの上で凍えているとは」

狩人は目を丸くしてたずねました。

「あきれた道づれでしてね。わたしは火をたこうと思ったのですが、だれも薪を運んでくれなかったのです」

櫛売りがぶつくさ不平を鳴らすと、塩売りと木綿売りもだまっていませんでした。

「まったく、あんな不精者と一緒になったばかりに、凍え死にするところだったんですよ」

「ほんとに…」

こう言って２人も、やはり他人のせいにしました。

眉をひそめて、かれらの話を聞いていた狩人が言いました。

「火をたくのがおっくうで寒さにふるえているなんて、いやはやあきれた話だ。命が助かっただけでも幸いだ。さあ、．とっとと出ていきなされ」

狩人は行商人たちを小屋から追い出してしまいました。

ほとけが選んだむこ

ある山里にトルセという柴刈りの若者がいました。かれは暮らしが貧しいので、嫁ももらえませんでした。

トルセは年下の若者たちが嫁をもらってまげを結っているのに、あごひげが生える年になっても、背中に編み髪を垂らしているのが恥ずかしくてなりませんでした。

それで、なんとかして嫁をもらおうと思っていましたが、貧しいトルセに娘をくれる親はいませんでした。

（さて、いつまでたってもひとり暮らしなのか…）

トルセはゆううつになりました。そこで嫁のきてが現れるのを待たないで、なんとしてでも自分で見つけようと思いました。

ある日のこと、トルセは柴刈りの帰りに、柳のおい茂った泉のほ

とりで水を汲んでいる美しい娘を見かけました。
　黄色のチョゴリに黒いチマ、つやつやしたお下げ髪には薄絹のリボンをつけています。
　心を引かれたトルセは、娘のそばへ寄っていき、重たそうに持ち上げようとしている水がめをすばやく頭にのせてやりました。娘は若者の顔をちらっと横目で見ると、顔を赤らめ急いで立ち去りました。トルセは口もきけなかったのでがっかりしました。
　（どこの娘だろう。あとをつけていこうか）
　ぼうぜんと後ろ姿を眺めていたトルセは、思いきってあとを追いました。
　娘は水がめのしずくを指ではらいながら、．しおり戸のついたわらぶき家へ入っていきました。トルセは柴を背おったまま戸の外に立っていましたが、「ごめんください」と、あらたまった声で呼びかけました。すると戸が開き、年輩の女が顔を出しました。
　「どなたですか。何かご用で…」
　「薪はいりませんか」
　「よく乾いた薪ならもらいましょう」
　主婦はしおり戸をあけてトルセを庭に招き入れました。みすぼらしいわらぶきの家ですが、手入れはゆきとどいていました。
　トルセは庭にしょい子をおろして縁側に座り、水を一杯求めました。主婦は台所から水を汲んできてさし出しました。
　トルセはどんぶりを手にして、さりげなくたずねました。
　「娘さんがおいでなのに、どうしてお年寄りが水を汲んでくださるのですか。若者は娘さんが汲んでくれる水がおいしいのですがね」

「うちに娘がいることを、どうして知ってるんです？」
主婦はつっけんどんに答えて、トルセをにらみつけました。
「チョウは花をしたい、若者は娘にひかれるのがあたりまえじゃありませんか。縁があるかどうか見合いでもさせてくださいよ」
「なんですって、あんたのような人はまっぴらごめんだよ。さっさと出ていっておくれ」
主婦は怒ってトルセの背中を押しました。だがトルセは、どうせ話を切り出したからにはと、ずけずけ言いました。
「ほら、ちょっとした男前じゃないですか。そう怒らずに、願ってもない福の神が現れたと思って、娘さんに一目合わせてくださいな」
「ふん、薪売りのくせに、なにさ福の神だなんて…。お前のようなむこなんか、おことわりだよ」
「貧乏人は貧乏人同士でうまが合うというもんです。わたしは働き者で心もやさしいんですよ。いったいどこが気に入らないんですか」
主婦はそれには答えようともせずに、
「さあさあ、もういいから帰ってください」
と言って、トルセを追い出してしまいました。
「薪とりをしていたんじゃ嫁ももらえんのか」
がっかりしたトルセは、それからというもの嫁をもらうことなどきっぱりとあきらめ、ただ黙々と仕事にうちこんでいました。
数日後のことです。柴刈りに山へ行ったトルセは、雨が降り出したのでケヤキの木の下の地蔵堂へ入っていきました。ところがそこには、一人の女が仏像の前に食べ物を供えて、しきりに祈っていました。

「ほとけさま、うちのひとり娘を金持ちの家にとつがせてくださいまし。娘を頼りに細々と暮らしているこの後家をあわれに思って、りっぱなむこを世話してくださいまし」
と言いながら、両手をすり合わせていました。
（娘のことならほとけに祈るよりも、おれに祈ればよいものを…）
トルセは笑いをこらえて、その女に目をこらしました。
するとどうでしょう。それはこの前かれを追い出した主婦ではありませんか。そこでかれは、あのときの仕返しをしてやろうと思いました。
（あ、腹がへった。あの供え物から先にたいらげてやろう）
仏像の後ろにかくれていたトルセは、そっと供え物に手をのばしました。祈りごとに夢中になっていた主婦は、供え物が盗まれるのにも気がつきません。トルセは餅やチジム（お好み焼に似た食べ物）、ゆで玉子などを取ってふところに入れました。
ふと顔をあげた主婦は、供え物がなくなったのを見て、ほとけが食べたものと思い、しきりに手をすり合わせました。
「ほとけさま、わたしの真心を汲みとってくださってありがとうございます。たくさん召し上がってくださいまし」
「うむ、せっかく運んできたごちそうだからな」
こうつぶやいたトルセは、ほとけの声をまねて叱りつけました。
「なんじゃこれは。食べ物がまずいぞ。真心がかよっとらん。これはきっと罪をおかした手でこしらえたものにちがいない。それで食べ物がけがれたのじゃ」
「はい、恐れ入ります」

主婦は食べ物がまずいととがめられたので、地べたに身を伏せて顔もあげられません。トルセはなおも責めたてます。

「この罪をぬぐうためには、あすから 15 日のあいだ、娘のけがれのない手でこしらえた食べ物をもってきて供えるのじゃ」

「は、はい、仰せのとおりにいたします」

家に帰った彼女は、真心をこめて食べ物をつくるようにと娘に言いつけました。そして毎日昼どきになると、それを地蔵堂に運び、仏前に供えて祈りました。

一方トルセは、毎日昼食どきになると、柴刈りの手を休めては地蔵堂に入り、その供え物を食べました。最後の 15 日目には、トリのむし焼きやブタのばら肉、腸づめなどたいへんなご馳走が膳に並びました。

トルセはそれもすっかりたいらげて、おごそかに言いました。

「たいしたご馳走だ。そちの真心をめでて縁結びをしてつかわす。あすの昼ごろ、川辺で釣りをしている若者をむこに迎えるがよい」

「ありがとうございます」

翌日、ほとけに言われたところへ行ってみると、はたして釣り糸を垂れているおっとりとした若者がいました。

主婦は駆けよってその手を取りました。ところがなんと、それはあの薪売りの若者ではありませんか。

でも主婦はほとけが縁結びをしてくれたむこなので、いまさら何も言えません。かえって、かれを冷たくあしらったことが悔やまれました。

「ほとけさまが選んだおむこさんとも知らず、すんでのところで、転がりこんだ福の神をしめだすところだったわ。さあ、うちへまい

りましょう」

「いや、両班の息子が貧乏人の娘と縁を結ぶわけにいきません」

トルセはわざと断り、それとなく相手の顔色をうかがいました。

彼女はぎくりとしました。

「でも、ほとけさまが縁結びをしてくださったんですもの、断ったら罰が当りますわよ。うちの娘は暮らしは貧しくても、きりょうよしで気立てもやさしいのですから…」

彼女は知恵の深そうな男前のトルセに、縁談を断られはしまいかと気をもみました。

トルセはいかにも気のりがしないといったふうに婦人に伴われていき、例の娘と婚礼をあげました。彼女はその後、トルセにだまされたと知りましたが、かれをむこに迎えたことで後悔はしませんでした。それは、かれが心がやさしいうえに働き者だったからです。

恥をかいたキツネ

ある山里に還暦を迎えたヤギがいました。

子ヤギたちは、親ヤギの還暦祝いに村の動物たちを招待しました。牛や馬など大きな動物も、ウサギやリスなど小さな動物もヤギの家へやってきました。子ヤギたちは客のもてなしに大童です。

ところで招かれたけものたちは到着した順に席を占めたので、年に関係なくごっちゃまぜに座るようになりました。すると、けものたちのなかから苦情が出ました。

「盃をかわすにも、年寄りと若いのが一緒に座っていれば具合が悪い」

そこでけものたちは年の順に座りなおすことにしました。

このとき、招かれもしなかったキツネがすばしこく立ち上がって上座を占めようとしました。

「あつかましい奴だ。そこはお前の座るところじゃない」

年寄りのけものたちがキツネをたしなめました。するとキツネは口を大きくあけ、歯をむき出してほざきました。

「この世にわしほど長生きし、見聞の広いけものはいまい。わしは天の国、水の国とこの足の及ばないところなんぞありゃしない。月の世界の月桂樹にのぼり、その枝の数まで数えてみたのじゃ。どうかね、だれか月桂樹の枝の数を知っとる方がいなさるかね」

キツネは座中を見まわしましたが、誰も答える者がありません。

「ほれ、ごらんなさい。ここには、わしよりも年が多くて経歴をつんだ方はいますまい。ここで一番の年寄りはわしにきまっとる。オホン、キャン」

こうしてキツネは、けものたちを押しのけて上座に座りました。けものたちはキツネが憎かったのですが、口をつぐんでいるほかありません。キツネはそっくり返って、真っ先に盃を取り上げようとしました。

そのとき、どこからともなく悲しい泣き声が聞こえてきました。驚いて声のするほうを見ると、カメが短い首を伸ばして泣いているのです。

「縁起でもない。このめでたい日に場所柄もわきまえないとは、失礼にもほどがある。さっさと出ていけ」

けものたちは怒って、口ぐちにカメを責め立てました。するとカメはおずおずと涙をぬぐいながら答えました。

「恐縮ですが、どうかわしの話を聞いてください。わしの息子が幼いころ月桂樹を2本取ってきて、あの原っぱに植えました。それが数千年も育ったころ、天が崩れるというわさが立ったのです。それでわしの息子は、月桂樹を切って天に昇り、それで星に柱を立て

て天が崩れおちないように支えました。

　それから木の枝で堤を築き、銀河の洪水を防いでいるうちに、つかれきって息たえたのです。

　あれが亡くなってから、堤の木の枝から芽が吹き出して数千年も育ち、あんな大きな月桂樹になったのです。あの月の世界の月桂樹を見上げるたびに、亡くなった息子のことが思い出されて、つい泣き出してしまったのです」

　けものたちは大きくうなずきました。

　「そうだろうとも。この世にカメより年の多い生き物はいまいよ」

　けものたちはキツネをとがめました。

　「面の皮の厚いキツネめ、さっさとカメに席をゆずって消えうせろ」

　けものたちをだまして上座に居座ろうとしたキツネは恥をかき、尻尾を巻いて逃げ出しました。

　しかし、カメは上座に座ろうとしませんでした。

　けものたちがカメに、遠慮なく上座に座るようにとすすめると、カメは言いました。

　「実を言えば、あの悪賢いキツネを追い出して、ヤギさんの還暦を楽しくお祝いしようと、わしが芝居をうったのだよ」

　「ハッハハハ、カメさんのおかげで還暦を楽しく祝えるようになりましたね」

　けものたちはみなカメの知恵に感心しました。

兄岩と弟岩

あるところに兄岩と弟岩がありました。

岩は泉の清水を飲み、日ましに大きくなりました。そこの裏山には、天の神がつかわした雄鳥（おんとり）がいましたが、雄鳥はつね日ごろ、兄岩と弟岩にねんごろにさとしていました。

「泉の水を飲むときには、年上のほうが先に飲み、年下のほうはあとで飲むんですよ」

そこで兄弟は泉の水を飲むときは兄岩がまず先に飲み、弟岩はあとで飲みました。弟岩は、それが不満でなりません。

（兄さんのあとで飲んでいるから、こんなに背が伸びないのだ）

それで弟岩は、兄岩にしつこくねだりました。

「兄さん、きょうからはぼくから先に飲ましてくれよ。そうすれば、ぼくだって兄さんのように大きくなれるだろうからさ」

弟思いの兄岩は、

「いいとも、じゃ、きょうからおまえが先に飲みなよ」

と言って、ふくべを弟にわたしました。

その日から弟岩は、自分が先に泉の水を飲みました。ところが欲張りな弟岩は、兄の分も残さず飲みほしてしまうのです。

兄岩は、残り少ない水で腹ごしらえをするほかありません。そんなわけでいつも腹をすかして過ごしました。けれども弟岩を思って、そんなことはおくびにも出しませんでした。

兄の分まで飲んでしまう弟岩は、見ちがえるように大きくなり、いつしか兄岩と肩を並べるようになりました。

にもかかわらず、かれはふくべを兄にゆずろうとしません。むしろ兄よりももっと大きくなろうとして、泉にたまる水を全部飲みほしてしまうのです。

水をひとり占めにした欲ぶかい弟岩は次第に大きくなり、やがて兄岩を見おろすようになると、ものすごく威張るようになりました。かれは兄岩を見おろして話しかけました。

「おい、きょうからぼくが兄だよ。だから、ぼくを兄さんと呼ばなきゃだめだ」

「な、なんだと？他人がこのことを知ったら、ぼくら兄弟をどう思う？後生だからそんな恥ずかしいことは言わないでくれ」

兄岩はかれにこう言いふくめました。

「ふん、背の高いのが兄じゃないか。おまえはきょうからぼくの弟だ」

弟岩はこう言って、兄岩を見くだし威張りちらしました。

「世の中に弟が兄になるなんて、そんなばかな話があろうか」

村人たちはこれを聞いてあきれかえり、舌打ちしました。

「ほんとに、自分を育ててくれた恩も知らない奴だ」

このうわさは天の神がつかわした雄鳥の耳にも伝わりました。雄鳥がただちにこの事実を告げると、天の神はたいへん怒りました。

「自分を育ててくれた恩も知らぬ、そんなたちの悪いやつがまたといようか。いますぐ、恩知らずの弟岩の腰をへし折ってしまえ」

激怒した天の神は雷神を呼んで命じました。

「ゴロゴロゴロッ！」

雷神は空を引き裂くような雷鳴をとどろかせ、稲妻を走らせて高慢な弟岩の腰を打ちました。

自分が兄であると威張っていた弟岩は腰が折れ、その場にへたばりこんでしまいました。

そのときから腰の折れた弟岩は兄岩を見上げるようになり、二度と自分が兄であるとは言わなくなったそうです。

とむらいの頭巾をかぶったネコ

ある村に、たいへんネコ好きな農夫がいました。

農夫はある日、野良の帰りに、親を亡くして悲しそうに泣いている子ネコに出会いました。哀れに思ったかれは子ネコをふところに入れて家に帰り、育てました。

ネコの分として朝夕ご飯とおかずを皿にもってやり、夜はあたたかい床に入れてやりもしました。

主人にかわいがられながらネコはいつしか親ネコに育ちました。耳がピンと張って目が丸く、ネズミ捕りも上手でたいへんりこうでした。昼は留守番の役目もりっぱにはたし、いつも主人にほめられました。

ある年の秋のことでした。

それほどネコをかわいがっていた主人が、重病にかかってしまいました。

鍼もし、薬もつかってみましたが、いっこうに効き目がなく、病はしだいに重くなるばかりです。

ある日、一人の医者が、

「あなたの病気にこれといった薬はありません。ただ一つあるにはあるんだけれど、手に入れるのは容易でありません」

と言いました。

主人は、一体それはどんな薬なのかとたずねました。医者は病人の最後の望みだからと、むだとは知りながら薬の処方を教えました。

「それは、毎年汗水たらしてつくった穀物を食い荒らすネズミがひろめた病気だから、ネズミを1,000匹退治すれば治るでしょう。しかしとてもじゃないが、そんなに多くのネズミをね」

「そうですか。ところでネズミ1,000匹を…」

主人は深いため息をつきました。村人の助けをかりても、到底捕らえることができそうになかったからです。

かれは涙にくれました。その哀れな姿を見守っていたネコの目にも涙が光りました。重態におちいった主人を見捨てるわけにいかないと思ったネコは、そっとおもてに出ました。

ネコは村中のネコを訪ねてまわり、どうしたらネズミを捕らえることができるだろうかと相談してみたり、ぽつねんと煙突のそばに座って、多くのネズミを一挙に捕らえる方法を考えてもみました。

そのとき、葬式をおこなっていた隣の家から泣き声が聞こえてきました。ネコはうら悲しい思いで垣根越しに目を向けました。多くのとむらい客が訪ねてきて、とむらいの頭巾をかぶった喪主(もしゅ)に弔意(ちょうい)を述べています。

ふと、ネコの頭に妙案が浮かびました。自分も頭巾をかぶって喪

主のように振舞おう、ということです。
　家の壁には主人が法事のときにかぶる頭巾がかけてありました。ネコは押し入れを伝って壁を這い上がると、主人の頭巾を取って頭にのせました。そして壁穴の前にしゃがみこんで、ネズミが現れるのを待ちかまえました。
　しばらくすると、1 匹のネズミが穴からひょこっと顔を出しましたが、ネコを見るとびっくりして穴の中へ逃げこもうとしました。ネコはすかさずどなりつけました。
　「おいこら！　いくら盗みをはたらくとはいえ、礼儀も忘れてしまったのか。わしはいま親に死なれて喪に服しているが、おまえらネズミどもは 1 匹もとむらいに来やしない。まったく失礼千万なやつらだ。わしが親に死なれたことを喜んでいるようだが、いまに見ろ。わしは仲間をみんな呼び寄せて、礼儀作法もわきまえぬおまえたちを皆殺しにしてくれるからな」
　ネズミは恐れをなして穴の中へ逃げもどり、仲間たちを集めて相談しました。
　「どうかね、弔問に行こうじゃないか。でないと、きっとひどい目に合わされるよ」
　「そうだな。いくら悪いやつでも、おくやみを言うとむらい客に手出しはしまい。じや、わしが行って様子をうかがってみよう」
　相談をかわしたのち、1 匹の年寄りネズミが穴からはい出てきました。
　かれは、「アイゴー、アイゴー」と泣き声をあげているネコの前にひざまずいてあやまりました。
　「このたびは、まことにお気の毒でございます。てまえどもがい

たらなかったので、これまでごあいさつにあがれなかったことを深くおわび申しあげます」
　ネコはその好意に謝意を表するふりをして、ネズミを送り帰しました。
　それで安心したネズミたちは、つぎからつぎへと穴から出てきて、おくやみのあいさつをしました。
　するとネコは、
　「みんながあいさつに来てくれてまことにありがたい。ところでみなさんの方は数が多いが、わしはひとりなので、いちいち答礼するのも容易なことでない。というわけで失礼だが、一族がみんな一度に弔問に来てくれると助かるんだがな」
　と言ってネコはいつ、どこそこの庭で待つと言いました。ネズミたちもそのほうが都合がよいので、二つ返事で承知しました。
　ネコと約束したネズミたちは、村の仲間にはもちろんのこと、野ネズミや山ネズミにも知らせを出して、約束した日に広い庭へ集まることにしました。
　はたして約束の日になると、ネコがとむらいの頭巾をかぶって待っている庭へ、ネズミの群れが集まってきました。
　ネコはそのとき、すでに庭のまわりにネズミたちに気づかれないよう仲間をかくまっておき、ネズミがみんな集まった頃合を見はからって襲いかかることにしていました。
　ネコがネズミの群れの中に入って「アイゴー、アイゴー」と泣き声を張りあげると、隠れていた仲間のネコたちが一斉にとび出してきて、ネズミを１匹残らず食い殺してしまいました。
　庭にはネズミの死がいが山と積まれ、その数は数千匹にのぼりま

した。すっかり満足したネコは、さっそく部屋の中へかけこんで女主人のチマのすそを引っ張りました。彼女が不思議に思って縁側に出てみると、庭にはネズミの死がいが山のようにうず高く積まれているではありませんか。

女主人はこおどりして、さっそくこのことを夫に伝えました。

それを聞くと、回復の見込みがないとあきらめていた病気はたちどころに治り、主人は元通り元気に働けるようになりました。

村の人たちは、知恵をしぼって主人に恩返しをしたネコを義理がたいネコだとほめそやしました。

かしこいウサギ

むかしむかし、深い山奥に１匹のトラがいました。ウサギやノロ、アナグマやタヌキのような弱いけものを餌食にする老いぼれのトラで、煙草を吸うこともできました。ある日、トラが松の木かげに座って火打ち石で煙草に火をつけ、うまそうにいっぷく吸おうとしていると、頭の上から木の葉がハラハラと落ちてきました。

煙草の煙を鼻から吹き出しながら木の上を見上げると、そこにはコウノトリが巣にうずくまって卵をあたためていました。

トラはコウノトリを見あげて、こう言いました。

「ねえ、コウノトリさん。その卵を一つくれないか。のどが渇いてね」

「ふん、あたしの卵がおまえさんの餌だとでも思っているのかい。そんなまぬけたことを言うんじゃないよ」

コウノトリはきっぱり断りました。
「なんだと？　わしにたてつく気か。木に火をつけてくれるぞ」
トラは、いきりたって怒鳴りつけました。
驚いたコウノトリは、卵の一つをトラに与えました。意地の悪いトラが木に火をつければ、巣ごとみな燃えてしまうからです。
トラはそれをペロリと食べてしまうと、またねだりました。
「おまえさんの卵は実にうまいな。もう一つだけくれないか。どうも食い足りないよ」
コウノトリは、かわいいひなにかえる卵をそれ以上渡すわけにもいかず、そうかといって荒あらしいトラの機嫌を損ねるわけにもいかないので、やるせない涙を流しました。
このとき、山のむこうから１匹のウサギがやってきて、その哀れな姿に目を止めました。
「コウノトリのおばさん、どうして泣いているんですか？」
ウサギは心配そうに聞きました。
すると木の下にうずくまってコウノトリを見上げていたトラが、
「しめた！　これはまたいい餌にありついたわい。ウォーッ！」
と言って、今度はウサギに襲いかかろうとしました。
木の上に気をとられ、トラがいるとは知らなかったウサギはびっくりしました。恐ろしさのあまりブルブルふるえていたウサギの頭に、ふとうまい考えが浮かびました。
「あら、トラのおじさん、こちらにいらしてたんですか。おなかが空いたでしょう。わたし、いま食べ物をとりそろえておじさんを探していたところなんですよ。さあ、早くまいりましょう」
ウサギはさもうれしそうに、トラの手を取って引っ張りました。

ウサギにさそわれると、トラは乗り気になりました。
「いったいどんな餌だい？」
「牛肉よりもおいしいスズメの肉ですよ。あんなコウノトリの卵とは比べものになりません。おいしいスズメの肉をたんとさしあげますから。さあ、早く…」
ウサギは長い耳をぴんと立ててうながしました。
「スズメの肉を手に入れたのなら、ここに持ってくればよいのに、どうして手ぶらでやってきたんだ？」
トラはゴクリとのどをならしながら残念そうにウサギを見つめました。
「だって、トラのおじさん、わたしがかついできたって、それだけでは足りないでしょうよ。じかに行ってたくさんお上がりになったほうがいいですよ。さあ、まいりましょう」
ウサギはこう言って先に立つと、道を案内しながらピョンピョンとかけていきました。
喜んだトラは、のそりのそりとウサギのあとにしたがいました。ススキの茂みのなかへトラを誘いこんだウサギは、こう言いました。
「さあ、ここに座って口を大きくあけて待ってくださいよ。わたしがスズメの群れを追ってきますから」
「な、なんだと？　これからスズメの群れを追ってくるというのか」
ついてきさえすれば、すぐさま餌にありつけるものと思っていたトラは、不満げにウサギをにらみつけました。
「スズメは生きたまま食べてこそおいしいんですよ。ちょっと目をつぶって待っていてください」

「目をつぶっていろというのか」

「そうですとも。そうすればスズメの群れが安心して口の中へ飛びこんできますから」

トラは目をかたくつぶってうなずきました。

そのすきにウサギは、トラのポケットにある火打ち石をそっと抜き取りました。そしてそれで火を起こし、ススキの茂みに火をつけました。

秋風に乾ききったススキの茂みは、またたく間に燃え上がりました。

火の手はあたかも、スズメの群れが飛んで来るような音を出しながら、トラのいるところへ迫りました。

「うむ、スズメの群れがだんだん近づいてくるんだな」

愚かなトラは目をかたくつぶり、いまかいまかと口を大きくあけて待っていましたが、毛に火がついたのでびっくりぎょうてんして逃げ出しました。

逃げまどうトラは、火だるまになってしまいました。結局、木に火をつけてコウノトリの巣を焼きはらおうとしたトラは、かえって自分が焼け死んでしまったのです。

老いたトラが焼け死んだという知らせは、トラの仲間たちにも伝わりました。

「おれたちがこの世で一番強いと思っていたが、火がうちのおじいさんを殺したのだ。これからは火に気をつけなくちゃならん」

こうしてその後、トラたちはたいへん火を恐れるようになりました。

それでむかしの人たちは、夜道を歩くときは火種を身につけて歩いたそうです。

欲張り裁判の失敗

地主のところで農夫のトクセが働いていたときのことです。

トクセがから竿で豆束を打ちおろしていると、豆ぐきの中から急に悲鳴があがりました。ヒヨコがから竿に打たれて死んでしまったのです。農夫たちがひと休みしていたとき、豆ぐきの中へもぐりこんだヒヨコにちがいありません。

縁側で居眠りしていた地主が、真っ赤になって怒りました。

「なんたることをしでかしたんじゃ、とんまめ。いますぐヒヨコ代を払え！」

「たかがヒヨコの１匹ぐらいで、ガミガミ怒鳴ることもありますまい」

トクセは腹が立って言葉を返しました。

「なんだと！　大事なヒヨコを殺したくせに…。つべこべ言わず、さっさと金を払え」

「いったい、いくら払えばいいんですか？」
「15 両は出さにゃならん」
「な、なんですって。15 両！」
トクセはもちろん、一緒に働いていた農夫たちもあきれてものが言えませんでした。
「ねえ、旦那さん、無学な農夫だからといってばかにしなさんな。ヒヨコ 1 匹が 15 両だとは、あんまりじゃありませんか」
「ずうずうしい野郎だ。そのヒヨコはもっと値が張るのじゃ」
地主とトクセは口争いをしました。
「とんでもない。ガチョウを殺したって、そんなに高くつきませんわい」
仲間たちもトクセの肩を持ちました。いくら地主の言いなりになる小作人であっても、そんな無茶な話を見すごすことができなかったのです。
地主は、代金の支払いをこばむトクセを郡守（郡の長官）の前に引き立て、裁いてもらうことにしました。
「こいつがうちのヒヨコを殺したんですが、代金を払おうとしません。それで郡守さまに裁いていただこうと思うのです」
地主が訴えると、郡守は目を怒らせてトクセをにらみつけました。
「これ、そちがヒヨコを殺したのは事実か？」
「はあ、たしかにわたしのから竿に当たって死にました」
トクセは正直に答えました。
「うむ、それならばなぜヒヨコ代を払わないのか？」
「適当な代金なら払いますが、15 両とは、とんでもない法外な値段ですから」

「うむ 15 両か…。これ、地主、15 両を出せとはあんまりじゃないかね」

「いいえ、めっそうもないことで…。それが、いまのところはヒヨコですが、殺されなかったら、りっぱな親鳥になるはずです。ですからニワトリ 1 羽の代金をとるべきじゃありませんか」

地主は途方もないへりくつをこねました。

「いいや、親鳥だとしても 15 両は高すぎる。高くてもせいぜい 2、3 両といったところでしょう」

トクセも負けずにやりかえしました。

「だまれ、こいつめ、よくもへらず口をたたきやがって…」

地主はこぶしを振り上げて大声で怒鳴りました。

「うちのニワトリはな、おまえらのような貧乏人のニワトリとは違うんだ。大事なアワを日に 1 合も餌にあてているんだぞ。だから冬になれば、はちきれんばかりにふとり、おまえたち貧乏人のニワトリよりも目方が 3 倍にもなるんだ。それを勘定に入れると 15 両だって安いもんだ」

郡守は地主の言い分を認めました。

「そのとおりじゃ。つべこべ言わず、15 両を払うのじゃ！」

郡守はトクセに命じました。

「どうせひとつ穴のムジナだ。郡守は両班の肩を持つにきまってらあ」

裁判を見物していた農夫たちが、こう言って騒いでいるときでした。

それまで負けずにがんばっていたトクセが、「じゃ 15 両払いましょう」と言って、おとなしく十五両をさし出しました。

「なんだよ、もう少しがんばればいいじゃないか」
「あんなにぺこぺこするから、おれたちがばかにされるのさ」
農夫たちはトクセのやり方が気に入りませんでした。
「礼儀もわきまえぬものどもめ。ここがどこだと思って騒いでるんだ」
郡守は農夫たちを叱りつけました。
地主はトクセがさし出す金をうけとり、財布にしまおうとしました。するとそのとき、トクセが太い声で申し出ました。
「郡守さま、一言申し上げたいことがあります」
「なんじゃね？」
座を立とうとした郡守が、再び腰をおろして耳をかたむけました。
「わたしはヒヨコを殺したのですが、親鳥の代金として 15 両払いました。地主の旦那は、ニワトリの餌として毎日 1 合のアワをやってふとらすと言いましたが、ヒヨコがニワトリになるまではアワが何斗ぐらいかかるでしょうか。いくら少なめにみても 2 斗ぐらいはかかるでしょう。するとわたしは地主の旦那にアワ 2 斗を食わせたニワトリの代金を支払ったわけですね。ところがヒヨコは死にました。だとすれば、地主の旦那の手元に残る 2 斗のアワは誰のものでしょうか。アワ 1 斗が 15 両するんですから、2 斗の代金として 30 両をわたしがもらわなければなりません」
この訴えに郡守はびっくりしましたが、当の地主の顔は真っ青になりました。
「そうだとも、30 両をいますぐ支払わにゃなるまい！」
見物していた農夫たちが口をそろえて騒ぎたてました。
他人の金をとんでもない口実で自分のふところにおさめようとし

た地主は、かえって自分のしかけたわなにかかり、一言も言えず、結局 30 両のお金を出さなければなりませんでした。

「ハッハハ…」

農民たちは地主をあざけり、腹をかかえて笑いころげたそうです。

金の壷を掘りだした若者

むかしむかし、あるところに 1 人の若者が暮らしていました。

著者は家が貧しかったので、20 が過ぎても嫁をもらうことができませんでした。

かれはまだ未婚なので、編み髪を垂らしている自分の姿が恥ずかしかったし、まげを結った若者たちがうらやましくてなりません。早くすてきな嫁をもらいたかったのです。

（どうすれば嫁をもらうお金ができるだろうか）

かれは思いにふけりながら、山へ柴刈りに出かけました。しかし、1 日かかってとった薪を売っても、金はいくらにもなりません。

若者はある日、薪を売って帰りながら財布をあけて、それまでためた金を数えてみました。ところが、いくら数えてみても、結納に

あてるチマの生地さえ買えそうにありませんでした。
　がっかりして草むらに横たわった若者は、金鉱へ行ってボタでも拾ってみようかとも思い、行商をしてみようかとも思いました。
　若者はそのうち眠りにおちてしまいました。夢に髪の白い老人が現れて若者に言いました。
　「おまえはお嫁さんをもらうお金がなくて困っているようだが、わたしがいいことを教えてあげよう。あの深い谷間をすこし登っていくと、土のもりあがったところがある。そこを掘れば金の壷があるだろう。そのなかから黄金のかたまり三つだけを取り出し残りは壷に入れたまま、もとどおり埋めておきなさい」
　と言ったかと思うと、老人はどこへともなく姿を消してしまいました。
　夢からさめた若者は、さっそく老人の教えてくれた谷間へ向かいました。サラサラと流れる谷川にそって谷間を登っていくと、たしかにこんもりと土のもりあがったところがあります。
　かれは鍬でそこを掘りはじめました。しばらく掘っていると、鍬になにか固いものがつきあたりました。そこからは、まばゆい光を放つ金の壷が出てきました。
　若者は急いでふたをあけ、壷の中をのぞいてみました。たしかに、そこには黄金のかたまりがぎつしりとつまっています。
　若者はそのなかから三つだけを取り出しました。だが、どうもそれだけではもの足りないような気がして、その場を去ることができません。
　若者はもう一度、壷の中をのぞきこみました。そこには黄金のかたまりがまだいっぱいあります。一瞬、若者の心は変わりました。

黄金のかたまり三つだけでも、結婚の費用にあてて余るほどのお金になるのですが、もう一つ欲しくなったのです。悪い欲を出したかれは、黄金のかたまりをもう一つ取り出しました。そして四つの黄金のかたまりを手にしてみると、今度は五つ欲しくなりました。

（えい、どうせ手をつけたからには、一つか二つもっと取り出してやろう）

若者の心に、こんな考えが浮かびました。あたりを見まわすと、だれも見ている人はいません。欲はさらにつのり、かれはもう一つの黄金のかたまりを取り出しました。

するとそのとき、にわかに稲妻がはしり、天地もさけんばかりの雷鳴がとどろきました。若者はびっくりして、その場にへたばりこんでしまいました。大雨が降りだし、嵐が吹きすさびました。谷川に濁流があふれました。

若者は命からがら山の背にはいあがり、かろうじて助かりましたが、すっかりあわてふためいていたので、手にしていた黄金のかたまりを無くしてしまいました。

がっかりした若者は、雨がやんだあと、その谷間へ引きかえしてみました。ところが土のもりあがったところは見あたらず、金の壷を掘り出した場所がどこだか、まるっきりわからなくなってしまいました。かれはがっかりして、その場にへなへなと座りこみ、ため息をつきました。

（ああ、欲張ったため、手に入れた宝物まで無くしてしまっちゃった）

だが、もうあとの祭りでした。

家へ帰った若者は、しょい子を無くさなかったことだけでも幸い

だと思い、その後は降ってわいたような幸運など望まず、一生懸命働いて自分の力で新しい家庭をきずいたそうです。

フンブとノルブ

1

むかし、ある村にフンブとノルブという兄弟が住んでいました。

2 人は実の兄弟でしたが、性質はまるで違っていました。弟のフンブは善良ですが、兄のノルブは欲張りで意地悪だという評判でした。

父は死ぬ間際に、2 人にこう言い残しました。

「おまえたちは兄弟の義理を守って、この家でむつまじく暮らすのじゃ」

けれども兄のノルブは父の遺言を守らず、弟をまるで下男のようにこき使いました。朝起きると、庭を掃けと怒鳴りつけ、それから骨の折れる仕事はすべてフンブにさせました。そればかりか、食事のときには自分たちの家族だけ白米の飯と肉汁を食べ、フンブの家族には菜っぱのかゆしかあたえませんでした。

「かあちゃん、白米のご飯食べたい…」

ある日、風邪をひいていたフンブの末娘が、かゆを食べずに駄々をこねました。隣の部屋でご飯を食べていたノルブが、ものすごく怒鳴りました。

「静かにしろ、この出来そこないども。子どもばかりつくりやがって…。騒々しくて飯も落着いて食えん。みんな荷物をまとめて出ていけ！」

ノルブは、フンブの家族を追い出そうとするのです。

「兄さん、この真冬にいったいどこへ引っ越せと言うんですか。子どもたちをよくしつけますからどうか考えなおしてください」

フンブが頼むと、ノルブは唾をぺっと吐きました。

「おまえはいつまで、おれに面倒をみてもらうつもりだ。とっとと出て行くんだ」

山野は雪に埋もれ、寒風の吹きすさぶこんな寒い日に８人家族が家を出るなんて、思っただけでも息がつまりそうでした。

「引っ越しはしますが、冬至の寒さが過ぎるまで待ってくれませんか」

フンブは重ねて頼みました。

「もともとおれは、一度こうと決めたらあとへはひかぬ性分だ」

ノルブは頑として聞き入れなかったばかりか、父の遺産をひとり占めにしようと、弟には何一つ譲りませんでした。

やがてフンブは、穴のあいた釜や縁の欠けた器をまとめて家を出ましたが、この先どうなるかと思うと心細くてしかたがありません。

ノルブの心のようにすさんだ風は、フンブ一家に激しく吹きつけました。野原に出ると子どもたちは寒さに足がかじかんで泣き出し、おぶさった赤子はひもじがって泣きました。

「泣くんじゃないよ。おれたちも家を建てて人並みに暮らそうじゃないか」
フンブはこう言って子どもたちをなだめました。
ところが実際、家を建てようとしても適当な地所が見当たりません。フンブはいろいろと考えた末、日当たりのいい場所を選んで、掘っ立て小屋を建てはじめました。
3 日目には家が建ち、むしろで作った煙突からは一筋の煙があがりました。これがわが家だと思うとフンブはうれしく、子どもたちの顔にも喜びの色があふれました。
しかし、家が建ったからといって、空腹がみたされるわけではありません。家族みんなで凍った畑を掘ってジャガイモを探したり、ドングリを拾い集めたりしてやっと飢えをしのぎました。

2

いつしか年の暮れも迫りました。
ノルブの家では、元日の前日から餅をつくのブタをつぶすのと、てんてこまいでしたが、フンブの家はその日の食事にもこと欠く有様です。妻は考えあぐねた末、夫に言いました。
「せめて正月だけは、子どもたちにひもじい思いをさせたくないわ。ねえ、一度、兄さんのところへ行ってきなさいよ。多分、人手が足りないでしょうから、お餅でもついてやって何か少しもらってきたらどうかしら。それでも兄弟なんですもの、まさか知らん顔はしないでしょう」
「それじゃ、兄さんの家へ行って餅でもついてやるとするか」

実直なフンブはこう言って家を出ました。

峠を登ると、ノルブの家の煙突から煙がむくむくとたちのぼるのが見えました。雇人たちが餅をついたり、料理をつくったりしています。それに、あけ放たれた引き戸からは、ガミガミと怒鳴りつけるノルブの姿も見えました。

フンブは門前まで来ると、腰を低くしてあいさつしました。

「兄さん、その後いかがお過ごしですか」

「お前はいったい何者だ」

ノルブは横目でじろりと見て、まるで赤の他人のように言うのです。

「ほんとうに私がわからないって言うんですか。弟のフンブですよ」

フンブはこみあげる悲しみをこらえて言いました。

「フンブがおれと、なんの関係があるっちゅうんだ」

ノルブはこう言って、かれを乞食のように追い払おうとしました。フンブはあきれて物が言えません。けれども、正月もひもじく過ごさなければならない家族のことを思うと、そのまま黙って引きさがるわけにはいきません。

「兄さんは私を忘れても、私は兄さんを忘れることができません。むかしから、困ったときは兄弟同士助け合うって言うじゃありませんか。実は餅つきを手伝いにきたんです」

「それなら人を雇うまえにくりゃよかったのに、いまごろやってきおって」

ノルブは、手伝うという言葉が耳よりだったのか、フンブにきねを渡しました。

フンブは3斗あまりの餅をひとりで1日中、汗だくになってつき

ました。そして全部つき終わるとためらいがちに言いました。

「あすは正月だというのに、うちの子たちは食べるものがありません。米１升でもくだされば正月を過ごせるんですが」

するとノルブは弟を怒鳴りつけました。

「なんだと、兄弟同士で駄賃を払えってのか。この義理知らずめが！」

「いいえ、そうじゃないんです。お礼をもらうつもりなどありません。ただ米を１升、借りたいのです。秋に必ず返しますから」

フンブは、首を長くして自分の帰りを待っている家族のことが目に浮かび、やっとの思いでこう言いました。

「それなら、これでも持っていけ」

ノルブはブタの餌にするヌカを一握りくれてやりました。

（1 日中、餅をついてやったのに、たったヌカ一握りとは…）

フンブはくやしくてなりませんでしたが、素振りには見せませんでした。

ひょっとしたらヌカの中に米でもまざってはいまいかと思って帰る途中、峠でフーッと吹いてみました。すると手のひらに米が何粒か残りました。フンブは目を輝かせました。

ところがそのとき、不思議なことが起こりました。手のひらの米粒がピョンピョンはねまわったかと思うと、1 粒が 2 粒になり 2 粒が 4 粒になるではありませんか。

「やあ、米がどんどんふえていく」

フンブはあまりのうれしさに、つい叫び声をあげました。米はいつの間にか手に握れないほどにふえ、フンブはそれを持って家に戻りました。

「さあ、米が一握り手に入ったんだ。兄さんの家で餅をついてやったら、これをくれたのさ」

フンブは敷居をまたぐと、妻にこう言いました。

元日の朝、フンブの家では久しぶりに餅をつきました。一握りの米なので、小さな餅が一つしかできません。それでも家族８人で食べなければならないのです。

ところがフンブの妻が餅に包丁を入れると、またしても不思議なことが起こりました。こんどは切った餅がピョンピョンはねまわり、一切れが二切れになったかと思うと、二つが四つに、その四つがこんどは八つになったのです。

「やあ、お餅がふえる！」

みんな大喜びでした。

おりしもノルブが年始回りの道すがら、その笑い声を耳にしました。

「いったい何がうれしくて笑っとるんだ」

意地悪でねたみやのノルブは、フンブの家のむしろ戸をやにわに押しあけました。

「おじさん、明けましておめでとうございます」

子どもたちは立ちあがって、新年のあいさつをしました。

「米もないくせに、どうやって餅をこしらえたんだ？」

と、ノルブが聞きました。

フンブは頭をさげ、米と餅がふえた話をありのままにしました。

「おれのやった米がふえたんだな。それじゃ秋に 10 斗ほど返すんだ」

ノルブはこんな無茶なことを言って、家を出ていきました。

3

寒い冬も去り、あたたかい春がやってきました。山野の草木はいろとりどりに芽をふき、南へ飛んでいったツバメも帰ってきました。

フンブは、ツツジやアンズの花が咲きみだれる丘へ、家族づれで山菜を摘みにいきました。このとき一つがいのツバメがやってきてフンブの家の軒下で飛びまわっていました。

「りっぱな瓦屋へ行かずに、なぜこんなみすぼらしい家に来たんだい？」

家に帰ったフンブは、ツバメが来たのをありがたく思い、軒下に板きれをつけてやりました。ツバメはそこで巣をつくって卵をかえしました。何日かたつと、かわいらしいツバメの子が 5 羽も生まれました。

子どもたちは、巣に悪いけものが寄りつかないように、毎日、庭で見守りました。ツバメの子は日に日に大きくなり、親ツバメのように空を飛ぼうと羽ばたきするのでした。

ある日の朝のこと、ツバメの巣で突然けたたましい音がするので、フンブがあたふたとおもてに出ると、異様な光景にびっくりしてしまいました。大きなヘビが軒下を這い上がって、ツバメを襲っているではありませんか。

「このヘビめ！」

フンブは棒切れでさんざん打ちのめしました。ヘビは背骨が折れ地べたに落ちて死んでしまいました。

さっそく、巣をのぞいて見ますと、4 羽のツバメの子と親ツバメは見当たらず、1 羽の子ツバメが地面でブルブルふるえています。

フンブはかわいそうな子ツバメを手のひらにのせ、
「あくどいヘビが親ツバメを食ったうえ、おまえの足まで折ってしまったんだな」
と言って、子ツバメの足に松やにをぬって糸で縛ってやりました。
手厚く看病したので、子ツバメはほどなく傷も治り、元気よく空を飛べるようになりました。
やがて、ツバメが南の国へ帰る日がきました。子どもたちは別れを惜しんで、ツバメの頭に小さなリボンをつけてやりました。ツバメは庭を一回りして空高く舞い上がり、ツバメの群れにまじって南方の国へ飛んでいきました。
そのころツバメの国では、王様がツバメの帰りを待っていました。みんなが帰ってくると、その間の出来事を聞き、その子ツバメにもたずねました。
「おまえは誰の子か。なぜひとりで帰ってきたのじゃ」
子ツバメは涙を流しながら答えました。
「はい、わたしはフンブの家の軒下で生まれました。ところがある日、突然ヘビに襲われて家族を失い、わたしはやっと生き残ったのです」
そして、フンブが薬をぬって足を治してくれたことを話しました。王様はすっかり感心してしまいました。
「世の中にそんな親切な人間がいるとは！」
「はい、そうではございますが、フンブはとても貧しく、やっとのことで一家の暮らしを支えております」
子ツバメは、フンブの暮らし向きをありのままに話しました。
王様はしばらく考えていましたが、宝箱から恩返しフクベの種を

取り出して、こう言いました。
「善良な人間を苦労させてはならぬ。この恩返しフクベの種を、来年の春にきっと届けてやるのじゃ」
「ありがとうございます」
子ツバメは礼を言ってフクベの種を受け取りました。

4

月日のたつのは早いもので、もう春がやってきました。
南の国へ飛んでいったツバメが巣に帰りはじめました。その中には、恩返しフクベの種をくわえたツバメもいました。そのツバメはフンブの家に飛んできて、洗濯ひもに止まりました。
「やあ、リボンをつけたツバメが帰ってきた」
子どもたちはなつかしそうにツバメを迎えました。畑の手入れをしていたフンブとその妻がツバメを見上げていると、ツバメは2人の前に飛んできてフクベの種を落としました。
「これはめずらしいフクベの種だ」
フンブは種を手にしてこう言いました。
「父ちゃん、見せて」
子どもたちもみんな寄ってきました。
「ツバメがせっかく持ってきてくれた種だ。見てばかりいないで、早く植えなきゃ」
フンブは土塀の下に心をこめて植えました。

フクベの種よ、フクベの種
　早く芽を出し
　大きくなあれ
　水がめほどに大きくなあれ

子どもたちはこう歌いながら、土を盛って水をやりました。すると、その気持ちがかよったのか、すぐに芽が出はじめ、みるみるうちにつるが伸びて土塀に這いのぼりました。あまりにも早く育つので耳を澄ますと、すくすく伸びる音が聞こえるようでした。

フンブが棒を屋根にかけ渡すと、つるはそれを伝って屋根に這いのぼり、白い花を咲かせました。花の香りは１里四方にただよい、プーンと鼻をつくほどです。村中のハチやチョウが匂いをかいで飛んできました。やがて花はしぼんで落ち、水がめほどのフクベが五つもできました。

子どもたちはしきりにせがみました。

「父ちゃん、フクベを一つ取ってみようよ」

「だめだよ。これは中秋に取るもんなんだ」

フンブはこう言ってなだめ、フクベが固くなるのを待ちました。

待ちに待った中秋の日、ごちそうがないので、フクベの中身を煮て食べることにしました。フンブがのこぎりを持ってくると、子どもたちは屋根からフクベを取ってきました。

「それ引け、やれ引け、のこで引け。はてさてなにが出てくるやら？」

フクベを庭においてのこぎりで引きました。するとどうでしょう、フクベからは米がわき水のようにあふれ出て、山のようになりました。

「やあ、お米の豊作だ！」
子どもたちは飛び上がって喜びました。フンブはつぎのフクベにのこぎりを入れました。
「それ引け、やれ引け、のこで引け。はてさてなにが出てくるやら？」
今度はお金がざくざくとあふれ出ました。
「やあ！　もうお金の心配はいらないぞ！」
子どもたちは手をたたいて喜びました。
「それ引け、やれ引け、のこで引け。はてさてなにが出てくるやら？」
3 番目のフクベにのこぎりを入れました。
今度は煙がパッと立ちのぼったかと思うと、中から美しい天女が現れ、鼓を打ちながら残りの二つのフクベに、「出てきなさい、赤と青の魔法のビンよ」と言いました。
すると、4 番目のフクベがゴロゴロ転がって真二つに割れ、中から赤い魔法のビンが出てきました。
5 番目のも真二つに割れて青い魔法のビンが出てきました。
「なにかご用ですか」
赤と青のビンは声をそろえてたずねました。
天女はその門いに答えるかのように、鼓をドーンと打ち鳴らしました。すると赤いビンから材木をかついだ大工が大勢出てきて、またたくまに大きな瓦屋根の家を建てました。離れ屋つきで、りっぱな門構えの屋敷です。
家中の者はあっけにとられました。
今度は青いビンの口から、色とりどりの絹織物があふれ出ました。

「やあ！　これからは誰にもひけをとらない豊かな暮らしができるようになったぞ」
家中が小躍りして喜びました。
これを見て満足した天女はさっと身をひるがえして、どこへともなく消え去りました。

5

貧乏人のフンブが急に金持ちになったといううわさは、たちまち村中に広まり、欲ばりのノルブの耳にも入りました。
「フンブが金持ちになったと？　どうせ泥棒でもしたんだろう…」
とは言ったものの、ねたましくてならず、大急ぎでフンブの家へ行きました。ところが、見すぼらしいわらぶき家のあった所に、りっぱな瓦屋根の家が目につくと、びっくりぎょうてんし、
「家ごと盗むなんてことは、できっこないはずだが…」
と首をかしげました。そして家の前まで来ると、
「誰かおらんのか」
と大声で叫びました。
フンブの妻と子どもたちが出てきましたが、みんなきれいな絹の着物を着ていたので、それとも知らず、
「ノルブがごあいさつにあがりました」
と、丁重にお辞儀をしてしまいました。
「おじさん、そんなに改まったりなさらず、どうぞお入りください」

長女のオンニョンがノルブの袖にすがって、あたたかく迎え入れました。
「おじさん」という聞き慣れた声にはっと気がついて頭をあげたとたん、ノルブは驚いて袖を振り切りました。
「この手を放せ！　おやじはどこへ行ったんだ」
「お父さんは今度できた畑へ出かけました」
と、オンニョンが答えました。
ノルブはぎょろぎょろ見まわしながら部屋に入りました。ところが土足であがったので、つるつるするオンドル床にドシーンと尻もちをついてしまいました。
「こしゃくな奴らめ。わしがすべるように床に油をぬりおったな」
かんしゃくを起こしたノルブは、杖で鏡のような床を叩きました。
「おじさん、どうかそんなに怒らないで、どうぞお座りになってください」
こう言ってオンニョンは座ぶとんを出しました。
「わしゃ、盗っ人の座ぶとんには座らん」
ノルブが怒って座ぶとんを投げつけた拍子に、紙をはったばかりの障子が破けてしまいました。
おりしも野良からフンブが帰ってきました。
「ようこそ、いらっしゃいました」
フンブはひざまずいて丁寧にあいさつをしました。
「おまえ、どこで盗みをしてこんなに大げさにしつらえたんだ？正直に言ってみい」
ノルブは横目でにらみつけながらこう言いました。

「盗んだなんてめっそうもない。これはみんなツバメが持ってきてくれた恩返しフクベのおかげなんですよ」
フンブはありのままに話しましたが、ノルブは信用しません。
「そんな馬鹿な話があるもんか。恩返しフクベから、どうやって家ができるって言うんだ」
「信じられないとおっしゃるなら、家と家財道具が出てきた魔法のビンを見てください」
フンブは「盗んだ」と言われたのががまんならなかったので、押し入れから赤と青のビンを取り出して見せました。それは世にもまれなりっぱなものでした。
「じゃ、ほんとうにこの中から出てきたというんだな？」
「はい」
「それなら、これはおれのものだ」
ノルブは、それをひったくるようにして家に持ち帰りました。そしてさっそく赤いビンに「これ、ビンや、小さなわが家を大きいりっぱな家にしておくれ」と言いつけました。
するとビンの中から、くわやおのを手にした者たちが大勢出てきて、あっというまにノルブの瓦屋を取り壊し、その場に見すぼらしいあばら屋を建てると、またビンの中へ入ってしまいました。
「なんて意地の悪い奴らだ」
ノルブはあまりのくやしさに歯ぎしりし、こんどは青いビンにこう言いつけました。
「さあ、ビンや、わが屋の着物とふとんをみな絹織物に替えとくれ」
すると、たちどころにビンから炎が立ちのぼり、着物やふとんは

焼けて、部屋中がぼろぎれだらけになってしまいました。
「ああ、これでなにもかもおしまいだ。フンブのやつ、おれをだましおって！」
ノルブはさんざん嘆いたあと、フンブのところへ飛んでいきました。
「おいフンブ、おれたちは兄弟だ。敵(かたき)同士でもあるまいに、なんでおれをだまして、こうまでいじめるんだ」
「そうじゃないんです。どうか落ち着いて、わたしの話をよく聞いてください」
フンブは、ヘビにかまれたツバメの足を治してやったことや、恩返しフクベの種をもらったいきさつを話しました。一部始終を聞いたノルブは、自分もそれにあやかろうと思ったのか、黙って帰っていきました。

6

明くる年の春、ノルブの家にも遅ればせながら一つがいのツバメが飛んできました。そして軒下に巣をつくり、卵をかえして子ツバメを生みました。
「さて、ヘビさえやってくりゃ、万事うまくゆくんだが。…　赤いウワバミだろうが黒いウワバミだろうが、早く来てくれんかな」
ノルブは庭先に座り、首を長くしてヘビがやってくるのを待ちましたが、ウワバミはおろか、ニシキヘビすら現れません。
「しょうがないヘビどもだ。ツバメを食いに来いっちゅうのに、なぜ来んのだ」

ノルブはいらいらしてつぶやくのでした。そのうち、子ツバメも親ツバメについて飛べるほど大きくなりました。

「いや、もうこうしちゃおられん。わしが行ってヘビを取ってこなきゃ」

杖を持って家を飛び出したノルブは1日中、林の中を探しまわりましたが、1匹も見当たりません。

ノルブはへたへたと座りこんでしまいました。ちょうどそのとき、三角の頭をした恐ろしいマムシが目に入りました。ノルブがうれしさのあまり、その行く手に立ちはだかると、やぶへ逃げようとします。

「マムシや、なにも逃げることはないだろう。さあ、うちへ行ってツバメの足をひとつ折ってくれんか」

と言って杖でマムシの頭をこづきました。気が荒立ったマムシは急にノルブの足にかみついて逃げてしまいました。

「あーっ」

ノルブは足をつかんで、尻もちをついてしまいました。みるみるうちに足がはれあがってずきずき痛み、やっとのことで家に帰ることができました。そして床についたまま動けず、3 日目にようやく立ち上がりました。

「ツバメの足を折るのはヘビにしかできないってことはなかろう」

ノルブは自分の手でツバメの足を折ろうとたくらんだのです。そしてすぐ、はしごに登って軒下の巣から子ツバメを取り出し、足を折ったあと、まるでヘビがしでかしたかのように

「おお、かわいそうに。けしからんヘビめが、おまえの足をこん

なふうにしてしまって。さぞ痛かろう」
　と言って、いい加減に足を縛ってやりました。
　そのため子ツバメは長く苦しみ、ほかのツバメよりもずっとあとになって南の国へ帰り、その間の出来事をツバメの王様に告げました。
　「世の中にそんな悪い人間もいるのか…。そいつにはこの種を与えよ」
　ツバメの王様は仕返しフクベの種を渡しました。
　また春がやってくると、ツバメはその種をくわえてノルブの家へ飛んでいきました。ノルブはフクベの種を手にすると、うれしさのあまり踊り出し、さっそく土塀の下に植えて実るのを待ちました。
　やがてノルブの家の屋根に大きなフクベが 10 も実り、中秋に全部とり入れました。
　「それ引け、やれ引け、のこで引け。さああふれ出ろ、金銀財宝」
　ノルブはそわそわしながら、最初のフクベにのこぎりを入れました。すると 10 個のフクベがみなはじけたような音をたてて割れ、中から棍棒を手にした大男がどっと出てきました。
　「兄弟の情も知らぬ不届き者め！　この棍棒をくらえ！」
　悪者をこらしめる大男たちはノルブをめった打ちにしました。
　「どうか命だけはお助けください」
　ノルブは両の手を合わせて許しを乞いました。
　すると大男たちは姿を消し、今度はフクベから泥水があふれ出て、ノルブの家や畑を跡形もなく押し流してしまいました。
　こうしてノルブは、一瞬にして無一文になってしまったのです。

ヘビの恩返し

ある年、空に穴でもあいたのか、雨はいつまでたっても降りやみませんでした。

何日もつづいた雨に、地上はどこも水びたしです。谷という谷に大水があふれ、田畑や家をおし流し、水におぼれた人やけだものの悲鳴がたえませんでした。

そんなとき、ひとりのおじいさんが小舟を大水のなかへこぎ出しました。それはとても心のやさしい、勇気のあるおじいさんでした。

おぼれた人やけだものを、ひととおり陸(おか)に救い上げて引きかえそうとしたとき、どこかで救いをもとめる子どもの泣き声がしました。

おじいさんはその子を見つけて、舟に引き上げました。

すると、こんどはシカが流れてきたので、それも救い上げました。そのあとまた、傷ついたヘビが流されてきました。見ると気味が悪くなりましたが、おじいさんはそれも助けて、舟を岸へつけました。

シカとヘビはそのままやぶの中へ姿を消し、あとには子どもだけが残りました。

「さあ、おまえもうちへお帰り」

おじいさんは、ぐずぐずしている子どもにこう言いました。

「おじいさん、ぼくには帰るところがありません。どうか一緒に連れていってください」

両親が大水にのまれて死んだので、どこにもよるべがないというのです。

おじいさんは、みなしごを連れて帰りました。そしてその様子をみると、たいへんりこうそうで、しっかりしているので、ひとりもののおじいさんはその子を養子にしたいと思いました。

「どうだ、きょうから、わしの子になってくれるだろうね」

「はい、そうします」

その子も喜んで答えました。

こうしてみなしごは、おじいさんにかわいがられながら、楽しい毎日を送るようになりました。

それから何日かたったある日のことです。

おじいさんが庭でむしろを編んでいると、シカが１匹現れました。このまえ助けたあのシカでした。

シカはおじいさんの服のすそをくわえて、外へ引いていこうとしました。

（どうしたんだろう？　また助けてもらいたいのだろうか）

こう思いながら外へ出ると、シカはおじいさんを山へ連れていきました。

峠の先に大きなほら穴がありますが、シカはその中へ入っていく

のです。おじいさんもあとについて入りました。すると、そこにはまばゆい光を放っている箱が一つありました。

ふたをあけると、なかには金と銀のかたまりがいっぱい入っています。

それを持って帰ったおじいさんは、田畑を買い、大きな家をたてました。シカのおかげで大金持ちになったのです。

いっぽう、おじいさんに助けられた子は若だんなと呼ばれる身分になりましたが、大金を身につけたせいで、しだいに金使いが荒くなりました。

そして悪い遊び友だちとばくちをうったり、酒を飲んだりして、まじめに働こうとしなくなりました。

「せがれや、お金がちょっとできたからって、なまけるのはよくないよ。遊びぐせがつくと、心の正しい人間になれないからな」

おじいさんは心からこう言いきかせるのでしたが、かれは、

「ふん、ちょっとお金を使ったからって、そんなけちなこと言うんじゃないよ」

と口ごたえをし、村中をまわって、おじいさんがまま子いじめをし、召し使いのようにこきつかうと言いふらしました。

村の人たちが、おじいさんは人助けをして、シカから恩がえしをされたじゃないか、と言うと、「そんなこと、みなでたらめですよ。あの大水のとき、腹黒く盗みをはたらいたんですよ」と、もっともらしげに言いました。

うわさは口から口へと伝わり、とうとう郡守（郡の長官）の耳にまで入りました。

郡守はさっそく役人をつかわして、おじいさんを捕らえてきました。

「おまえは大水のとき、人を助けるとかいって、小舟を乗りまわして、どろぼうをはたらいたそうじゃな」

「め、めっそうもございません」

「なんじゃと。それでなくちゃ、おまえのような貧乏人がどうして大金持ちになれたのじゃ。ありていに白状しろ」

「じつは、あのとき助けたシカに案内されて、金銀の入った箱を手に入れたのです」

「こやつ、それはみんなまっかなウソだ。おまえのむすこが言っているんだぞ。たしかな証拠があるわけじゃなし…」

郡守はうむを言わさず、おじいさんを牢屋へぶちこんでしまいました。

（あれがそんなことを言うなんて…）

おじいさんは考えれば考えるほどくやしく、腹がたってなりませんでした。けれども、どこへも訴えるところがないので、毎日、ため息ばかりついていました。

そんなある日のことです。

「いくらお金に目がくらんでも、恩をあだでかえすとは、ひどいやつだ」

おじいさんがまた大きなため息をついていると、どこかでスルスルと妙な音がしました。

ふしぎに思って音のするほうに目をこらすと、1 匹のヘビが壁をつたっておりてきます。よくみると、それは大水のときに助けたあのヘビでした。

ヘビは床におりると、すぐさまおじいさんの足にかみついて姿をかくしてしまいました。

助けたヘビにかみつかれたおじいさんは、悲しくてたまりませんでした。

「なんてこった。せっかく助けてやったのに、こんな仕打ちをうけるなんて…」

おじいさんは胸をかきむしってくやしがりました。

息子もなにも信じられないと思うと、悲しみがこみあげ、涙がどっとあふれました。

傷口をなでながら、ヘビにかまれたからにはもう死ぬほかないとあきらめていると、さっきのヘビが青葉を１枚くわえて現れました。

そして、おじいさんの足の傷口にそれをはりつけ、また姿をかくしました。ところがどうしたことでしょう。青葉が傷口にはられるとたちまち痛みがとまり、傷もみるみるうちに治ってしまったのです。

（ついさっき人の足をかんだやつが、こんどは薬をぬってくれるなんて…）

おじいさんが小首をかしげていると、牢屋の外で人びとのさわぐ声がしました。

「たいへんだ。郡守の奥さまがヘビにかまれたぞ」

「早く医者を呼べ。早く」

耳をそばだてて聞くと、こんなことを言ってさわいでいるのでした。

それから何日かすると、人びとのなげき悲しむ声がまた聞こえてきました。そして、

「どの医者もみなさじを投げたからには、もう助かるみこみがないというのか」

という郡守の声がしました。
（それなら、わしがためしてみよう）
おじいさんは、ヘビがおいていった青葉を手にとって考えました。そして牢番を呼んで、自分が傷を治してみたいから、そう伝えてほしいと言いました。
番人の話を聞いた郡守は、おじいさんを連れてくるようにと言いました。
屋敷に案内されたおじいさんは、体中はれあがって、虫の息をしている病人の枕元に座りました。
そして、ヘビがくわえてきた青葉をとりだして傷口へあてました。するとどうでしょう。たちどころに全身の毒がぬけ、むくみがひきはじめたのです。やがて奥さんは息が楽になり、床の上に起きなおりました。
「うーむ、たいした腕じゃ。医者にも治せぬ傷を治すとは…」
郡守はおじいさんをほめちぎりました。
「なんで、わたしが医者よりすぐれているものですか」
おじいさんは、それまでの出来事をつつみかくさずに話しました。郡守ははじめて、おじいさんがまったくの正直者であることを知りました。
「ヘビのような生き物も助けられた恩を返すのに、人間の子として生まれ、どうして命の恩人をうらぎるのか。いますぐそいつをひっとらえてこい」
恩知らずの息子が引ったてられてくると、郡守はおじいさんを口をきわめてほめ、願いごとがあったらなんでも聞きとどけるから、えんりょなく申すようにと言いました。

「親の恩にそむいたやつだと思うと腹にすえかねますが、お金に目がくらんだためのあやまちですから、心を入れかえる機会をあたえてくださいますよう、ひらにお願い申しあげます」

おじいさんは牢屋につながれることになった息子が哀れで、こう言いました。

郡守は大きくうなずきました。

「さすがに心のやさしい老人じゃ。おい、こんなりっぱなお父さんに恩をあだで返した罪がどんなに深いかわかるか」

郡守のきびしい言葉に、息子はおいおい泣きながら答えました。

「わたしはお金に目がくらんで、人の道にはずれたことをしでかした者ですから、死罪をまぬがれません。けれどもわたしが死ねば、心のやさしい父をやしなう人がいなくなりますゆえ、心を入れかえて父に孝養をつくしたいと思います」

郡守は息子の罪を許しました。

その後かれはすっかり改心しておじいさんに孝行をつくし、幸せに暮らしたそうです。

自分の指を切った盗っ人

むかし、あるところに仕事がきらいで、のらくら遊んでばかりいる男がおりました。

それでどうして暮らしていけるかって？　その男はこっそり人のものに手をつける盗っ人だったのです。

ある晩、ばくちでお金をすっかりはたいたその男は、人びとでこみあっている通りにやってきて、キョロキョロとあたりを見まわしました。そして小さなあみ袋をさげた少年に目をつけました。

少年は袋をさも大切そうに持って歩いているのです。

（なにが入っているのだろうか。あんなに大切そうにして…）

あみ袋に目をこらした盗っ人は、きっと金目のものが入っているにちがいないと思い、そっとあとをつけました。

渡し舟に乗るつもりか、少年は川の方へ向かいました。川べには渡し舟が一そうつながれ、お客たちが乗っていました。少年が船頭にお金をはらって舟に乗ると、盗っ人も客をよそおって、あとにつづきました。

渡し舟はおだやかな水の上をゆっくり進んでいきました。

夕やけが赤くはえた川のけしきは、なんともいえないほど美しいものでした。水の上を泳いでいるカモの群れが、魚をとらえようと、ときどき頭を水中につっこんでいます。

お客たちはみなそれに目をうばわれていましたが、少年は見向きもせず、へさきに座っていました。

盗っ人はそっとあみ袋をのぞきました。なかには絹のふろしきにつつんだものがありました。

やがて、少年はうとうと眠りはじめました。そのすきに盗っ人は、袋に手を入れてつつみをつかみました。

そのとたん、何かが指にくらいついたのです。

「あっ、いたた！」

あまりの痛さに、盗っ人は思わず悲鳴をあげました。

まわりの人たちがおどろいてふりむくと、盗っ人はあわてて袋から手を引きましたが、なんとその指にはスッポンがくらいついているではありませんか。手をいくらふっても、スッポンはくいついてはなれません。

「あれ、ぼくのスッポンを盗むつもりだったんだね」

目をさました少年は、盗っ人をにらみつけました。

せっぱつまった盗っ人は、けんめいになってあやまりました。スッポンに一度くいつかれたら、首をはねるまではなさないことをよ

く知っていたからです。

「お願いだ。代ははらうから、どうかスッポンの首を切ってくれよ」

「いやだよ。これは母さんの病気に使おうと、30 里も先の村で買ってきたんだ。どろぼうの手助けをするために使うなんて、まっぴらだよ」

少年は声をはりあげて、盗っ人をなじりました。

「じゃ、代を倍にしてはらうから、どうかこいつの首を切ってくれよ」

「2 倍だろうが、10 倍だろうが、それはごめんだよ」

少年はきっぱりと断りました。

盗っ人は青くなってたのみました。

「なあ、おれはまだこんなに若いんだ。この年で指をなくしたらどうなる？　どうか、そこを考えてくれよ」

「そりや、おまえがうちのお母さんより若いのはよくわかるよ。母さんは 80 をこしているんだからな」

「そんなら、お母さんは病気が治っても先が知れているじゃないか。でも、おれは 50 年は生きるだろう。だから、どうかあわれに思って…」

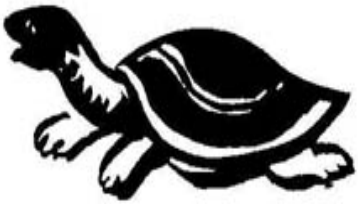
盗っ人のぬけぬけした言葉に少年はカッとなって、「なんだと、こいつ」と叫ぶなり、横っつらを張りました。

「やい、まだ若いと言ってるやつが、なぜまっとうに働こうとせず、どろぼうなんかしてるんだ。おれのお母さんは、いっぺんも人のものに手をつけたことのない正直な人間だ。お母さんのその清い一日一日は、こそこそ盗みをしながら生きるおまえの 50 年より、

ずっと尊いのだ」

　まわりにいた人たちはみな、少年の言葉にうなずきました。

　盗っ人は黙りこんでしまいました。そして岸につくと、そのよごれた命を救いたい一念から、自分で自分の指を切って逃げていきました。



おろかな地主

むかし、あるところに自分がおろかであることを知らないで、いばってばかりいる地主がおりました。

アヒルをたくさん飼っていても、それが何羽になるか知らないのです。

ある日、そのアヒルが１羽、イタチにさらわれました。けれどもアヒルの世話をしている下男は、主人が数もかぞえられないので、１羽ぐらいなくなってもわかるまいと、気にもかけませんでした。

ところが、その日の夕方のことです。

「アヒルはちゃんといるだろうな」

地主がやってきて、こうたずねました。

「はい、それはもう、まちがいありません」

下男は平気な顔をして答えました。

すると地主は、アヒルを2羽ずつ合わせてみました。そしてさいごに1羽残ったのを見ると、真っ赤になって棒きれをふりまわしながらどなりました。

「こいつ、わしをだますつもりだな。アヒルを1羽どうした？　早くさがしてこい！」下男は地主の思いがけない知恵に驚きましたが、たいして心配しませんでした。

あくる日、アヒルを1羽つぶして食べてしまった下男は、そしらぬ顔をして地主に言いました。

「だんなさま、アヒルを見つけました。もう一度かぞえてみてください」

「よし」

地主はまたアヒルを2羽ずつ合わせてみました。こんどはちゃんとそろっているので、地主はうなずいて言いました。

「うん、みなちゃんとそろっている」

下男は心のなかでニヤッとしました。

（やっぱり大変なばかもんだ。それなら毎日2羽ずつ食べてやれ。そしたら 3 年のつとめが終わるころは、わしもだいぶ太るだろうな）

ほんとうの友

むかし、あるところに父親と息子が２人で暮らしていました。

その父には友だちがあまりいませんでしたが、息子にはたくさんいて、毎日、入れかわり立ちかわりたずねてきました。

「チャンセ、いるかい」

友人たちは部屋にあがりこんでは、笑いさざめきながらお酒を飲んだり、歌をうたったりして遊びました。

けれども、父の友だちはめったにたずねてきませんでした。

（お父さんはなんてきまじめなんだろう。友だちづきあいもしないで、何が楽しみなんだろうか）

こう思った息子は父にたずねました。

「お父さんには友だちがいないのですか？」

「わしにもいるさ」

「じゃ、なぜ遊びにこないのですか？」
「遊びにこなくたって、友だちにはちがいないよ。わしの友だちはみな働き友だちだから、野良へ出れば会えるんだ」
息子は父の言葉が理解できず、首をかしげました。
「友だちなら、しょっちゅう会って、笑ったり騒いだりするのがほんとうで、ただ一緒に働いているというだけで、どうしてほんとうの友だちになれるんですか？」
しかし父のほうは息子の言葉が理解できず、首をかしげました。
そこで２人は、どちらがほんとうの友だちかをためしてみることにしました。
父親は家のブタを１匹つぶして、こもにつつみました。
「チャンセ、これをかつぐんだ」
息子は言いつけられたとおり、こもにつつんだブタを背負いました。
月のない夜道を２人は歩きました。
「おまえの友だちの家はどれだ？」
ある村の入り口で、父は前に立って歩く息子に聞きました。
「この村の家はほとんど、ぼくの友だちの家です」
「それじゃ、そのまま誰かの家へかけこんで、かくまってくれとたのんでみろ」
「どうしてですか？」
「おまえの友だちが、どれほど友情に厚いか、ためしてみるのさ」
息子は、わかったとうなずきました。
ちょうどそのとき、ある家から明りがもれてきました。チャンセといちばん親しくつきあっている若者の家でした。
息子はその家の戸をあけて中へ入り、

「おい、おれをかくまってくれよ」
とたのみました。
「なんだ、それは？」
友だちはチャンセが背負っているこもづつみを見て、目を見張りました。
「見てもわからんのか。追われてるんだ。早くかくまってくれよ」
「かくまってくれって？　そんな恐ろしいことをしでかして、なんでここへとびこんできたんだ」
友だちは、あとのわざわいを恐れて、チャンセを押しもどしました。
チャンセは腹をたてながら、つぎの家へ向かいました。そこは飲み友だちの家でした。
「どろぼうだ、つかまえろ！」
父親が声をはりあげると、息子はその家にかけこみました。
「おい、これをちょっとかくしてくれないか⊥
チャンセは息をはずませながら言いました。
「えっ、なんだいそれは？」
友だちはこもづつみを見て、目を丸くしました。
「何がなんだ。ブタだよ。追われてるんだ。早くかくまってくれよ」
チャンセはいらいらしながら言いました。
「ちえっ、ブタを盗んだんだな。おれんちには、そんなものをかくす場所がない。ほかへ行けよ」
その友だちもあとがたたっては大変だと、チャンセを外へ押し出しました。
2度も追い出された息子は気分を害して、第三の家へ向かいました。

（こんどこそは、うまくいくだろう）
そこは、ばくち仲間の家でした。
また父が「どろぼうだ。つかまえろ」とどなると、チャンセはその家へとびこみました。
「おい、とんだぬれぎぬを着せられたんだ。おれを助けてくれよ」
息子は息をはずませながらたのみました。
「どうしたんだ？」
「おれがブタをかついでいるんで、どろぼうと間違えられて、追われてるんだ」
「ブタを盗んだから、盗っ人呼ばわりされたんだろう。ここでぐずぐずしないで、早く出ていけよ」
その友だちもあわてて、チャンセを外へ押し出しました。
3度も追い出されたチャンセは、がっかりしました。
それでもまた、何人かの友だちをたずねてみましたが、だれ一人助けてくれる者がありません。
（いつもは、骨だろうが肉だろうがけずってやる、なんて言っていたやつらが、いざとなると、だれ一人見向きもしないのか）
友だちが多いことを自慢にしていたチャンセは、気がめいってなりません。
こんどは父親のほうがこもづつみをかついで、自分の友だちの家へ向かいました。
そこは野良仕事をしながら親しくなった呉さんの家でした。
父は息子に、「どろぼう！」と叫ばせたあと、その家にとびこみました。
「呉さん、困ったことができたんだ。これをちょっとかくまって

くれないか」
　父はおろおろしながら言いました。
　「えっ、なんだそれは？」
　「見てわからんのか。どろぼうだとか言って追われてるんだ。早くかくまってくれよ」
　「おやおや、とんだ災難だ。さあ、あがれよ」
　呉さんは、どろぼうという言葉を聞いても、すこしも気にせず、喜んで父親を迎えいれました。
　やがて家の中からは、おだやかな話し声がもれてきました。外で父が追い出されるのを待っていたチャンセは、耳をそばだてました。
　「どろぼうをかくまったからといって、あとがこわくないのかい？」
　「じょうだんじゃない。おまえが盗みをはたらくなんて、そんなこと信じやしないよ」
　「なぜ信じないんだ」
　「そりゃ、おれの親友だからさ。おれは親友がまじめな男だってことを知っているから、そんなサル芝居にはのらないんだ」
　チャンセは胸がキリでさされたように痛みました。
　（あ、これこそほんとうの友だちだ。あんなに深く信じているから、平気で部屋にあがれと言えるんだ）
　チャンセは、飲み友だちやばくち仲間を親友だと考えていた自分のおろかさに、はじめて気づきました。
　部屋の中からは、また話し声が聞こえてきました。
　「あしたは誕生日なんだろう。つまらないものだが、おれの気持ちだと思って、ブタ肉を受けとってくれよ」

父が呉さんに言う言葉でした。

ほんとうの友とはどんなものかを知った息子は、深く反省しました。そして酒を飲んだり、ばくちを打ったりしてつき合ってきた仲間をすて、ほんとうの友だちをつくるためにつとめたのです。

さかさにつけた鼻

なまけぐせがつくと、いろいろとつまらないことが心に浮かぶものです。

むかし、ある村にペドリという少年がいました。

（あくせく働かないでも、うまくやっていけないものだろうか）

ふと、こんなことを考えたペドリは、なんとか口実をもうけて、骨のおれる仕事はすまいと決めました。

それで、両親が畑へ草とりに行こうと言うと、床にころがっておなかが痛いと泣きべそをかきました。子ぼんのうの両親は、ペドリの言うことをすこしも疑いませんでした。

両親をうまくだましたペドリは、ふとんにもぐりこんで昼寝ばかりしました。

でも、ふとんを頭からかぶっていると、息が苦しくてなりません。
「ちぇっ。鼻の穴はどうして下を向いているんだろう。煙突みたいに、上を向いていたら楽に息ができるのに…」
ぶつぶつこんなことをつぶやいていたペドリは、またうまいことを考えつきました。村はずれの、なんでも願いごとをかなえてくれるおじいさんにたのんでみようと思ったのです。
ペドリは勢いよく起き上がって、おじいさんをたずねていきました。
「おじいさん。ひとつお願いがあるんですけれど…」
ペドリはいきなりこう頼みました。
「なんだね」
「鼻の穴が目の下についているので、息をするのが苦しいのです。煙突みたいに上へ向けてくださいませんか」
「ハッハハ。みんなそのほうが息をしやすいと言っているのに、どうして不便だと言うのじゃ」
「ぼくは、ほかの人とはちがって、ふとんを頭からかぶって寝るくせがあるのです」
「それなら、くせをなおせばいいじゃないか。鼻をつけかえるのはよくないよ」
「いいえ、このくせはなおせそうにありません。どうかお願いを聞きいれてください」
ペドリはしつこくせがみました。
「そんなことをして、後悔はしないだろうな」
「後悔だなんて、とんでもない。恩に着ますよ」
あまりしつこくたのむので、おじいさんはペドリの願いを聞きと

どけることにしました。
　そして、ペドリの鼻をアメのように引きのばし、穴を上向きにして、ひたいにつけてやりました。
　「おじいさん、ありがとう」
　ペドリは喜びいさんで、うちへ帰りました。そして、ふとんの中へもぐりこみました。
　鼻の穴が上を向いているので、いろいろと便利でした。息が楽なことはいうまでもなく、ハエがたかって顔をくすぐることもなくなりました。それに、ふとんの中は暗くて、ぐっすりよく眠れるのです。
　（ほかの人間どもはなんておろかなんだろう。こんなに便利だってことも知らないで…）
　ペドリはいい気になって、すっかり思いあがりました。でも、そんなことが長つづきするはずはありません。
　ある日、となり村へ遊びに行く途中、夕立ちにあいましたが、かさもなく、どしゃぶりをさけるところも近くにありませんでした。
　全身がびしょぬれになるのはまだしも上を向いた鼻穴から雨水が流れこんで、息ができません。
　「ハ、ハクション！」
　苦しくてくしゃみをしても、鼻の中へ入る水をふせぐことができません。
　あわてて木の葉をむしり、鼻の穴をふさぎましたが、一度息をしただけで吹きとばされてしまいました。
　しかたがなく、手で鼻の穴をふさぎ口で息をしようとしましたが、それでは雨水が口の中へ流れこみます。

ペドリはあわてふためきました。でもそのうちに、うまいことを考えつきました。
頭を思いきりさげて歩けばよいと思ったのです。そして、けだもののように四つんばいになると、息がすこし楽になりました。
ところが、頭をさげて歩くので前が見えず、木のかぶにぶつかったり、みぞにはまったりするので、しまいには体じゅうどろまみれになり、もうそれが人間か動物かの区別さえつかなくなりました。
でもペドリは恥も外聞も忘れて這いつづけ、とうとう向こうからやってくる人の足にぶつかってしまいました。
「ひゃっ」
しりもちをついて見上げると、それはペドリの願いを聞いてくれたおじいさんでした。
「おやおや、けものかと思ったのに、おまえだったのか」
おじいさんはあきれたように笑いました。
ペドリは目をパチクリさせて、口をもぐもぐさせました。自分からせがんで鼻をつけかえたのですから、何を言うことがありましょう。
「どうせ、そうだろうと思ったわい。まじめに働こうとしないで、つまらんことを考えるから、こんな目にあうのじゃ」
おじいさんは舌うちして、ペドリを助け起こしました。すると鼻の穴から、また水が流れこみました。
「お、おじいさん。この鼻をな、なんとか…」
ペドリは、おじいさんのそでにしがみついてたのみました。
おじいさんはペドリの鼻をつまんで、もとどおりにつけかえてやりました。そして、言いました。

「鼻をさかさにつけてくれなんてことは、二度と言わんじゃろうな」

「はい、よくわかりました。これからはきっとまじめに働きます」

「よしよし。まじめにはたらこうと決心すれば、きっと正しい人間になれるだろう」

おじいさんは、やさしくこう言い聞かせました。

ペドリはその後、おじいさんの言葉を胸にきざんで、両親の手助けをしながらまじめに暮らしたそうです。

強欲商人と悪役人

むかし、ある村に青い絹売りの金(キム)と、赤い絹売りの李(リ)が住んでいました。どちらも欲が深く、悪がしこい商人でした。2 人は郡守に賄賂(わいろ)を使っていました。役所の力を借りると絹が高く売れたからです。

年の暮れでした。2 人の商人は絹を賄賂にだすのが惜しくて、どうしたものかと頭をひねっていました。そしてふと、うまいことに気がつきました。それは他人の品物を使って自分の顔を立てようと言う悪知恵でした。

日が暮れると、金はひそかに李の家に忍び入りました。かれは倉の鍵をあけて赤い絹を一巻き盗みました。そして翌日、それを郡守にさし出したのです。

その後、やはり同じことを考えていた李もまた、金の青い絹を盗んで郡守のところへ持っていきました。2 人はどちらも絹を盗もうと思っただけで、自分の倉の中の絹がなくなっていることには気がつきませんでした。

ところが、絹をうけとった郡守は 2 人の心のうちをすっかり見抜いてしまいました。

（フフン…赤い絹売りが青い絹を、青い絹売りが赤い絹を持ってきたことには、きっとわけがあるにちがいない）

悪知恵にかけては、絹売りにまさるとも劣らない郡守は、さっそく部下に命じて金を捕らえてきました。

金が郡守の前にひざまずくと、かれはいきなり怒鳴りつけました。

「不届き者め、ありていに白状しろ！」

おびえきった金は、青くなって両手をもみながら許しを乞いました。

「盗んだ品物をわしに寄こすとは何事じゃ。けしからん奴だ」

「どうか命だけはお助け下さい」

悪企みがばれた金は、ワナワナとふるえながらあやまりましたが、郡守は聞き入れてくれません。

「たわけたやつだ。ムチで打って牢にぶちこめ！」

金はムチでうたれ、青ぶくれした体で牢屋につながれました。

翌日、郡守はまた、李にもムチを加えて牢屋にぶちこみました。金と李は同じ牢屋にいましたが、2 人は互いに気まずい思いで背を向けあい、溜息ばかりついていました。

夜がおそくなってから、商人の妻たちが夕食を運んできました。2 人はそれぞれ自分の妻の耳に口を当てて、何やらひそひそとささ

やいていました。
翌朝になると、2 人の商人の下僕たちが賄賂の品物をどっさりとのせた馬をひいて、役所へ向かっていました。
ところで、それがあいにく、その地方へ狩りに出かけていた監司（道の長官）の目にとまりました。
監司は下僕たちを呼び寄せて、馬に積んだ荷物は何かとたずねました。かれらは、一部始終を監司に話しました。すると監司は、長いひげをしごきながらうなずきました。
「聞くがよい！　郡守をだますことも罪だが、それにつけこんで百姓の財産を奪う郡守も悪い。そんなわけで、この品物は当然、国におさめなければならぬ」
監司はこう言って、その品物を自分の馬に積みかえるようにと命じました。
狩りに出て思わぬ財物をせしめた監司は、うきうきとして従卒にたずねました。
「さて、あれに何が入っているんだろう？」
「商人どもの賄賂ですから、きっと珍しい品物にきまっています」
「うむ、じゃ、どこか居酒屋にでも立ち寄ってあけてみるとしよう」
監司はいそいそと馬を進めました。
一方、監司に賄賂をせしめられた郡守はくやしくてなりません。そこでかれは、商人たちを牢屋から引っ張り出してムチ打ち、もう一度賄賂を出しなおせとおどしつけて家へ帰しました。
家に追い帰された金の心も、おだやかではありません。もう一度

賄賂を使えば、商売の元金がなくなってしまうからです。
　どうすれば奪われた品物を取り返してきて、郡守に賄賂を出し、商売をつづけていけるだろうか、と思いめぐらしていた金は、何を思ったのか、日暮れになると李を訪ねていきました。
　2 人は、顔を合わせるとばつが悪かったが、うわべではさもうれしそうなふりをしました。互いにあいさつをかわしたのち、金がさきに目を細めて話をもちかけました。
　「李さん、品物を奪われたあげく、ムチまでくらうなんて残念でたまりません」
　「わしもまったくそうだよ」
　李もやりきれなさそうに、頬をふくらませました。
　「どうせこうなったからには、一か八かやってみましょうや。どうでしょう、今夜のうちに、監司の手に入った品物を奪い返して役所にみつぎ、商売をつづけようじゃありませんか」
　「実は、わしもそう思っとるが、なにしろ、相手が監司なので…」
　「なあに、こうなれば何も恐れることはありませんや。監司であれ、王様であれ、どんとこいですよ」
　「うむ、それもそうだな。じゃ、ひとつやってみるか」
　李もやぶれかぶれになって、相づちをうちました。
　郡守もまた、監司に横取りされた品物を取りもどそうと思っていました。その中には、絹やトラの皮、人参、シカの角など貴重なものが入っていると聞いたので、とてもがまんできなかったのです。そこであれこれと考えたあげく、腹心の部下を呼んで言いました。
　「どうだね。わしと一緒に、監司に横取りされた品物を取り返してこようじゃないか」と言ってお金を握らせました。

そうとはつゆ知らず、監司は品物をせしめたのがうれしくて、居酒屋で酒をあおっていました。

そのとき、覆面の男が刃物を手にして入ってきました。

「やい、奪った品物を返せ！」

びっくりした監司は、脇にあった木枕をつかむと、その怪漢めがけて投げつけました。

「うっ！」

木枕が顔にあたり、怪漢は手から刃物を落としました。

監司は、すばやくその刃物を手にとりました。

そのときまた戸が開き、郡守が姿を現しました。かれの手にも刀が握られています。2 人は切り合いをはじめました。切るか切られるかの果たし合いのすえ、監司は胸を切られ、郡守は横腹を刺されました。

そこへまた、金と李がやってきました。見ると、部屋には 3 人の男が血まみれになり、息絶えているのです。

2 人はそれでも目を皿にして財物を探しましたが、何も見あたりませんでした。悪がしこい監司は万が一の場合を考えて、財物をほかへかくしておいたのです。

ところで、部屋には包みが一つころがっていました。

（こうなったからには、あの包みでもひとりじめしよう）

金はわれさきにと、その包みを抱えて山の方へ逃げ出しました。李がそのあとを追いました。

2 人は崖の上で、包みを奪いあいました。しばらく上になり下になりしながら、とっくみあっていた 2 人は、包みを抱きあったまま崖下の深いふちに落ちてしまいました。

翌朝、目をさました監司の従卒たちは、部屋の中をのぞいてつぶやきました。

「まったくいい気味だ。欲につかれた強盗どもがくたばっている」

2 人の怠け者

2 人の男が峠道を登っていました。

左側の坂道を登っている男は、冠をかぶり、口をポカンとあけたままで歩いており、右側の坂道を登っている男は、胸に餅の包みをかかえていました。

峠の上まで登ってきた 2 人は、そこの木の下で疲れた足を休めました。

2 人はとなり合わせに腰をおろして、あいさつをかわしました。ちょうど昼時で、おなかが空いたので昼飯を食べようとしました。

そこで餅をかかえた男が、冠をかぶった男に話しかけました。

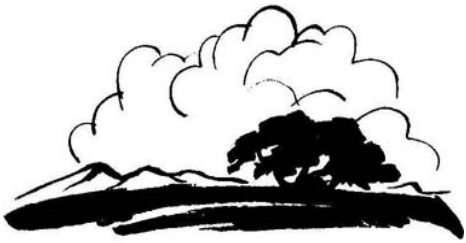
「この包みの中に餅が入っていますだ。家を出るとき、家内が昼飯分として首につるしてくれたけど、手を動かして取り出すのがおっくうで食べられやしない。ご苦労だが、ひとつ取り出して、わた

しの口の中に入れてくれないかね」

すると、冠の男は目を丸くして言いました。

「とんでもないことで。わたしはあの峠のふもとで、冠のひもが解けたけど、それを結びなおすのが面倒で、頭から冠が落ちないように、あんぐりと口をあけたままで登ってきたですだ」

こんなありさまで、2 人の男はおなかをすかしたまま座っていたそうです。まったくあいた口がふさがらない話じゃありませんか。



印刷＝朝鮮民主主義人民共和国

ㄱ－107249